応用心理学のクロスロード

特集 日本応用心理学会第88回大会報告

CROSSROAD ESSAY 私と応用心理学

15

2023 July

JAAP 日本応用心理学会

応用心理学発展への期待と課題

深澤　伸幸　（松蔭大学）

私は慶應義塾大学大学院修了後、事故防止の視点から30年近く、産業現場で主にフィールドワークを中心に研究活動を行ってきました。その過程で、多くの上級国家公務員や企業経営者の皆様とお話をさせて頂く機会が多々あり、彼らは異口同音に「心理学は相手にしていない」、「マスターベーションの学問」と評しており、残念ながらこれが一部とはいえ、心理学全般に対する社会の評価であると思うと、大変悔しい思いをしてきました。

なぜ、このような評価が出てくるのでしょうか。心理学のモデルとなっている医学を例にとってみますと、基礎医学の研究領域と応用としての治療医学が見事に両立し、社会に貢献しています。一方心理学には、分析研究や基礎領域といった必要条件はあるものの、社会的な課題への解決方法の研究や応用領域といった十分条件が未成熟であるのではないかと推察されます。

例えば、現場管理者からは「どの様な性格の者が事故を起こしやすいのか」、という問いかけが多々ありますが、残念ながら性格論を紐解いても明確には答えられません。また運転適性検査開発（例えば性格特性）に際しても、何故これほどまでに妥当性が低いのかと、困惑せざるを得ませんでした。この理由を探るべく、性格に関する自己評価と管理者による他者評価結果に加え、自動車事故発生件数の有無（客観的事実）とを関連分析すると、初めて無事故者と事故者の思考形態の差異が判明しました。無事故者は、自分自身の社会的に好ましい面と好ましいとは言いにくい面の両面を自己認知できていることに反し、事故者は自分自身の社会的に好ましい面のみを強く認知していることが分かりました。自分を良く見せようとする傾向に関しては、質問紙法では一般に虚構尺度の問題として取り扱いますが、この対策で十分でしょうか。あるいは性格に関する理論を修正することが必要となるかもしれませんね。心理学がさらに社会に受け入れられる方向に進めるためには、応用心理学の領域から基礎領域への疑問の提起をすることになるかもしれません。すなわち「行動する人間の性格」は、従前の理論体系だけでよいのか、あるいはバランス感覚を有する人間における「性格」を新たに構築する必要はないのであろうか、という問題点の提起となります。

まとめますと、今後社会的な課題解決を目指す応用心理学が目指すものは、①可能な限り人間行動の表出や客観的な事実との突き合わせを心掛けること、また②客観的な事実を視野に入れた、より安定的な方法を求め、客観的な事実の推移関係と意識の変化や行動の変容量の推移が記述できるように研究パラダイムを考え、③必要に応じて従前の理論への疑問を提起すると共に、応用心理学の視点から新たな理論の提案へと進むことが考えられます。

この度「名誉会員」に称されましたことに謝意を表し、老婆心ながら本学会を担われる新進気鋭の皆様方にこの場をお借りして、お話をさせて頂きました。

深澤　伸幸(ふかざわ・のぶゆき)／ 慶應義塾大学大学院修了。1997年 立教大学より博士(心理学)取得。運輸省所管（特殊法人）自動車事故対策センター、財団法人鉄道総合技術研究所基礎研究部安全心理研究室長を経て、現在松蔭大学コミュニケーション文化学部生活心理学科教授。「リスク・パーセプションと人間行動」（高文堂出版）、「改訂 ヒューマンエラーの心理学入門」（杏林舎）、「応用心理学講座 2：事故予防の行動科学」（福村出版）、「精神的指導―生徒指導のために―」（学術図書出版）、「職場の安全風土醸成に向けた教育プログラムの開発」（鉄道総研報告）等、単著、共著。

CONTENTS

[巻頭言] …… 深澤　伸幸（松蔭大学） …… 1
[CONTENTS] …… 2
[CROSSROAD ESSAY] …… 山本　勝則（名寄市立大学） …… 3
[特集] 日本応用心理学会第86回大会報告 …… 5
大会委員長からの報告 …… 来田　宣幸（京都工芸繊維大学） …… 6
大会スタッフからの報告① …… 大門　耕平（東北学院大学） …… 8
大会スタッフからの報告② …… 寅嶋（桜井）　静香（京都工芸繊維大学） …… 9
大会スタッフからの報告③ …… 権野　めぐみ（京都工芸繊維大学） …… 10
大会企画シンポジウム報告 …… 成田　智恵子（京都産業大学） …… 11
共催シンポジウム報告 …… 篠原　一光（大阪大学） …… 12
特別セミナー報告 …… 西崎　友規子（京都工芸繊維大学） …… 13
自主企画ワークショップ報告① …… 田中　真介（京都大学） …… 14
自主企画ワークショップ報告② …… 紺野　剛史（富士通株式会社） …… 16
研究発表報告① …… 日向野　智子（東京未来大学） …… 17
研究発表報告② …… 松本　友一郎（中京大学） …… 17
研究発表報告③ …… 笠置　遊（立正大学） …… 18
研究発表報告④ …… 下田　麻衣（京都ノートルダム女子大学） …… 19
研究発表報告⑤ …… 伊藤　将史（近江兄弟社高等学校） …… 20
研究発表報告⑥ …… 富田　瑛智（帝塚山大学） …… 20
研究発表報告⑦ …… 小倉　有紗（大阪大学大学院） …… 21
研究発表報告⑧ …… 金山　英莉花（同志社大学大学院） …… 22
研究発表報告⑨ …… 山田　昂暉（帝塚山大学大学院） …… 23
教育発表報告① …… 種ケ嶋　尚志（日本大学） …… 23
教育発表報告② …… 二見　優水（日本大学） …… 24
教育発表報告③ …… 谷口　淳一（帝塚山大学） …… 25
教育発表報告④ …… 大西　将宗（帝塚山大学） …… 26
教育発表報告⑤ …… 坂本　茅杜（帝塚山大学） …… 26
次回大会委員長の挨拶 …… 髙石　光一（亜細亜大学） …… 28
[アワード] …… 29
齊藤勇記念出版賞受賞 …… 藤田　尚弓（株式会社アップウェブ） …… 29
若手会員研究奨励賞 …… 横井川　美佳（京都大学大学院） …… 30
学会賞（論文賞） …… 井上　裕珠（日本大学大学院） …… 31
学会賞（奨励賞） …… 伴　碧（大阪大学大学院） …… 32
学会賞受賞論文へのコメント① …… 吉澤　寛之（岐阜大学） …… 32
学会賞受賞論文へのコメント② …… 古谷　嘉一郎（関西大学） …… 33
優秀大会発表賞① …… 竹内　倫和（学習院大学） …… 34
優秀大会発表賞② …… 和田　裕一（東北大学大学院） …… 35
優秀大会発表賞③ …… 軽部　幸浩（日本大学） …… 35
優秀大会発表賞④ …… 島田　恭子（東洋大学現代社会総合研究所） …… 36
優秀大会発表賞⑤ …… 桐生　正幸（東洋大学） …… 37
優秀大会発表賞⑥ …… 大森　哲至（帝京大学） …… 37
優秀大会発表賞⑦ …… 古澤　伸晃（日本体育大学） …… 38
[会員だより] …… 39
公開シンポジウム参加記 …… 森泉　慎吾（帝塚山大学） …… 39
研究−仕事　二足の草鞋 …… 亀田　凌雅（帝冢山大学大学院） …… 40
[書評 Book Review　本を出しました] …… 田中　真介（京都大学） …… 41
[コラム&トピックス] …… 42
応用心理学ハンドブック …… 藤田　主一（日本体育大学） …… 42
雑学心理学 …… 森下　雄輔（大阪国際大学） …… 44
[特別企画]「応用心理学のクロスロード」会員へのアンケート …… 45
常任理事会通信 …… 47
国際交流 …… 川本　利恵子 …… 47
齊藤勇記念出版賞選考 …… 川本　利恵子 …… 47
機関誌編集 …… 上瀬　由美子 …… 48
学会活性・研究支援 …… 田中　堅一郎 …… 48
広報 …… 谷口　淳一 …… 49
企画 …… 桐生　正幸 …… 50
倫理 …… 田中　真介 …… 51
事務局だより …… 軽部　幸浩 …… 52
学会賞選考 …… 木村　友昭 …… 53
学会史編纂 …… 古屋　健・軽部　幸浩・藤田　主一 …… 53
心理学検定 …… 小林　剛史 …… 54
学会だより …… 55
2021年度日本応用心理学会学会賞 …… 55
入会申込書 …… 56
「応用心理士」のご案内 …… 小林　剛史 …… 57
「応用心理士」資格認定申請のご案内 …… 58
編集後記 …… 59

CROSSROAD ESSAY

山本　勝則
（名寄市立大学）

■「関係」の重要性に気がつくまで50年

私は、臨床で精神看護を17年間実践してから教育・研究の世界に入りました。臨床にいた間も学生指導や非常勤講師をしていましたし、事例をまとめていました。しかし、教育・研究を本業にしたのは40歳近くなって、短大に移ってからです。そして、臨床と教育・研究の世界との違いに驚き、戸惑いました。それでもどうにか慣れて、30余年が経過しました。それらの職業生活を合計すると約50年です。

その50年を過ごしてみて、やっと気がついたことがあります。それは「関係」の重要性です。“精神看護に50年も関わって来て「関係」の重要性に気がつかなかった”と聞けば耳を疑うでしょう。自分でも認めたくはないのですが、来し方を振り返ってみて、今やっと気がつきました。私はこの本当に大切なことを軽視してきてしまいました。

■様々な「関係」（1）

ここで取り上げる「関係」には、臨床での人間「関係」も、研究を行う場合の人間「関係」も含みます。そして、「もの」と「もの」との「関係」や「こと」と「こと」との「関係」、さらには「こと」や「もの」と「ひと」との「関係」も含みます。この様々な意味での「関係」がいずれも重要で、臨床にも教育・研究にも当てはまります。「もの」や「こと」に関して「関係」を重視する姿勢とは、特定の物事の性質が明らかになっても、その性質は（個別に）それだけで成立しているわけではないとする見方です。あらゆる物事は「関係」の網の中にあり、純粋な「もの」や「こと」を知ることはできないという立場です。このことは議論のあるところですが、このまま続けるとこのエッセイの本筋を外れて隘路に入り込むので、話を元に戻します。

■臨床実践における人間「関係」

臨床での看護実践は、ケアする者とケアされる者との「関係」の世界でした。当時はほとんどの看護師がペプロウの『人間関係の看護論』を知っており、看護における人間「関係」が強調されていました。私も人間「関係」を意識していました。何より、精神面のケアを実際に行うためには良い人間「関係」が必須です。しかし、私は「関係」よりも、問題に注目するようになりました。“患者は病気だから患者なのであり、患者や家族は、医療を受けて問題を解決するために病院を訪れる”と考え、病気や問題を持つ患者という面に注目しました。それはそれで正当な考え方であり、看護の基本である看護過程の枠組みにも当てはまります。さらに、昨今強調されているEBMやEBNとも一致します。

これら問題に注目する見方と「関係」に注目する見方とは、かなり対照的です。一方を問題解決型と呼び、もう一方を人間関係型と呼ぶことにすると、以下のような違いがあります。問題解決型の見方は製品の修理と同じ構図で、効率良くかつ正確に元に戻すことが期待されます。故障した車を修理してピカピカに磨き上げるようなものです。それに対して、人間関係型の見方では、人と人の出会いに注目します。治療／修理したりされたりすることとは異なる、人間「関係」が生まれます。そしてそこで生まれた「関係」の中で相互作用が生じ、問題にも影響します。（こう書くと、人間関係型の方が人道的に見えますが、「関係」の中にもケアする者とケアされる者という立場の違いがあり、対等というわけではありません。）

「関係」に注目すると、様々なことが見えてきます。「関係」は相互作用と対になって生じます。つまり、「関係」は相互作用の仕方に影響し、相互作用の仕方は「関係」の在り方に影響します。さらに「関係」と相互作用は、人に幸福や不幸をもたらします。気持ちの良い人間「関係」と相互作用は、人生の大きな喜びの一つです。病気であろうとなかろうと良い人間「関係」と相互作用とは、人に満足感を与えます。ケアを提供する者にとっても、ケアを受ける者との良い人間「関係」と相互作用から充実感を得ることができます。そして、（ケアを受ける者は）病気にり患している間も、（ケアを提供する者は）その病人をケアしている間も、大事な人生の一部を生きています。人は常に生き

て貴重な体験をしており、そのことは、病気や問題だけに注目していては見えない面です。

■研究における人間「関係」

研究に関わる人間「関係」も重要です。優れた研究は協力「関係」や分担、助け合い（相互作用）を必要とし、多くの研究者が関わって生まれます。さらに、優れた指導者との出会いと信頼「関係」は極めて重要です。私は、臨床の場でも研究の場でも、大変優れた指導者に恵まれました。自分の研究成果が拙いことは忸怩たるものがありますが、70歳を過ぎた今でも教育・研究に携わり続けることができているのは、偏に指導者に恵まれたからです。

教育・研究について、応用心理学会の先生方で、ご指導をいただいた方のお名前を挙げさせていただきます。最初に研究の世界に招いてイロハから教えていただいたのは、故内海滉先生です。千葉大学亥鼻キャンパスの研究室にお伺いすると、必ず「おう、山本君、よく来たね。本当によく来た」と言って迎えてくださいました。そこで生じた人間「関係」と相互作用とが、私の研究への意欲を支え続けました。内海先生には、コミュニケーション場面における沈黙時間を測定する研究で、長年ご指導いただきました。

そして、その頃、コミュニケーションについて大坊郁夫先生に連絡を差し上げる機会がありました。その時に丁寧なお返事をいただき、それ以来何度もご指導をいただいています。看護場面でのコミュニケーションについては、川本利恵子先生からもご指導を受け、日本応用心理学会の運営に参加するきっかけをいただきました。日本応用心理学会については、第83回大会を開催するにあたって藤田主一先生から詳細な教えをいただきました。最近は、カウンセリングについて林潔先生からご指導をいただいています。これらの人間「関係」を、もちろんとてもありがたいとは思っていました。しかし、それなしでは教育・研究が成立しないほど決定的に重要であることには、最近になってやっと気づきました。

■様々な「関係」（2）

一旦「関係」の重要性に気がつくと、様々な「関係」が見え始めました。かつて調べていたコミュニケーションにおける「沈黙」も、発言との「関係」において意味が生じます。唐突ですが物理学の「量子もつれ」も、量子の本質よりも量子対の「関係」に注目します。さらに、どんな出来事も特定の「こと」だけが突如として生じるわけではありません。「こと」の前に別の「こと」があり、後にも別の「こと」があり、「こと」の連鎖により歴史が生じます。つまりどんな「こと」も「関係」の中で生じます。これらのことより、物事について考えるときに「もの」や「こと」の本質よりも、「関係」に注目する必要があると思います。

日本応用心理学会第83回大会

日本応用心理学会理事会

山本　勝則（やまもと・かつのり）／ 1951年生。秋田大学医学部附属看護学校卒業、秋田大学大学院教育学研究科修了。札幌市立大学教授・図書館長などを経て、現在名寄市立大学特別参事（大学院計画担当）／日本応用心理学会名誉会員。精神看護技術（メヂカルフレンド社）など。

日本応用心理学会
第88回大会報告
京都工芸繊維大学

日本応用心理学会第88回大会を終えて

日本応用心理学会第88回大会実行委員長：来田　宣幸
（京都工芸繊維大学）

●ありがとうございました！

無事に学会大会を終えることができて、ほっとしています。参加いただいた方、支援いただいた方、皆さまに感謝です。経緯を書くと長くなりますが、簡単に振り返ると、当初は2020年に京都工芸繊維大学で開催の予定でした。しかし、新型コロナの影響で中止。2021年は東北文教大学にてリモート大会として開催。ほぼコロナは収まりつつあるものの、2022年は、完全対面だけでなく、ハイブリッドやリモートのみなど、学会によってさまざまでした。対面で開催することを基本とし、ただし、多くの方が参加・交流できるよう多様な参加形態を確保する方針としました。

対面かリモートかの判断は正直難しかったです。応心の準備をまさにはじめようとしていた頃、コーチング学会（2022年３月開催）が直前に対面からリモートになりました。応心大会の時期は対面でOKだろうと楽観していましたが、ハイブリッド開催としつつ、リモートのみになる可能性も頭に入れなければ、と準備に迷いが生じました。最終の判断をするまで、迷い・悩みながらの対応で、非常に難しかったです。しかし、このような状況ですので、多少失敗したとしても大目に見てもらえるだろうとの安心感（?）から、せっかくなので、「思い切った挑戦をしてやろう」と準備自体を楽しむことができました。

●準備段階の難しさ

特に予算面は頭を悩ましました。対面となれば会場使用料が30万円かかるため、参加費は高め設定になります。リモートになれば開催当日にかかる費用がほぼなくなり、大幅な黒字になる可能性もあります。発表申込が延長になるのであれば、延長後は発表費を上げたらいいのでは、という発想から、超早期割・早期割引などのしくみも作ってみました。しかし、蓋を開けてみれば、ほとんどの人が超早期割での発表申込でした。対面開催を心待ちにされていたのだなぁと感じ、準備にも力が入りました。

実行委員には、変更・再変更・再再変更で、準備にエネルギーを浪費するのではなく、確定したところから担当をお願いしていきました。その結果、参加者への各種アナウンスが遅くなり、この点については大いに反省しなければなりません。発表者、参加者にとっては、具体的な方針ははやく出してほしかったと思います。申し訳ありませんでした。

●費用を抑えつつ発信する工夫

方針が例年と異なり、かつ、途中で変更になる可能性がある状況で大切なことは情報発信だと考えました。他の大会で業者とのやりとりをみて、細かい仕様の変更で追加料金が発生するなど相当大変そうです。おそらく、コロナ対応で当初計画通りにいかないだろうと考え、「デザインもプロ級、かつセキュリティも万全、見やすさも発信も十分」をめざすのは捨て、実行委員会からの発信を重視した手作り作戦としました。使ったのは、主に無料のサービス。メールによる発信に加えてジンドゥーのウェブサイト、グーグルのサービスをたっぷり活用、さらにSNSもTwitter、Instagramのアカウントを作り、YouTubeチャンネルの動画配信など、若手芸人が売れるために何でもする、に近い状況だったかもしれません。

参加者限定ページは、万が一、完全リモートになった場合は、一般研究発表や質疑応答を参加者のみに資料提示する必要があり、必須です。しかし、業者に発注せずに実現させるには…。また、軽部先生の個人の力に依存することも避けたいと考え、Slackを参加者限定ページとして使用することにしました。その後、1万件表示から90日限定にプランが変更になるなど想定外が次々に訪れましたが…。

●Slack活用

Slackはメールアドレス招待であれば参加者限定になりますが、フリープランではオーナー以外の参加者も招待できるなど、参加者限定でなくなる危険性がありました。今だからこそ開示できますが、性善説に基づく運営であった点は、本当はよくなかったと反省しています。ログインした人の名前やアドレスをチェックしながら、不正にワークスペースに入っていないか確認しつつ、結果的に大きな問題にはならなかったと胸をなで下ろしています。発表ごとのチャンネルを作り、抄録とスライドをアップして……。実行委員の寅嶋先生にはコメントを入れてもらい、参加者同士のチャットやスタンプなども自然発生して…。

Slack活用には、当日の学生スタッフの貢献も大きかったです。前日準備の際、「スマホで動画を撮影して、そのままチャンネルにアップできるのでは？」と声が上がり、試してみたら、案外簡単。スタッフには、ガンガン写真や動画を撮影してSlackにアップするようお願いしました。学会発表の機密保持と交流機会の確保の点から、本当はもう少し詰める必要がありましたが（ポスターを写真で撮ることを許可するのか、動画を撮影してよいのか、など）、久しぶりの対面交流をより活性化させるため、リアルでの接点がなかったとしても、スマホの「いいね」での交流にもつながったと感じました。

●フラッシュトークとお弁当

この2つはコロナに関係なく、2020年から取り入れようと考えていました。2017年の野球科学研究会でフラッシュトークをはじめて経験しました。口頭発表会場で短時間のプレゼンをするだけで、そのあとのポスター発表がかなり活性化していました。応心は専門領域が幅広いですが、かといって、領域に閉じこもるのではなく、他分野の人との交流も積極的に楽しんではるように感じます。今回、Zoomを用いたリアルタイムリモートも平行開催していましたので、別会場でも提示できたことは瓢箪から駒でした。特にポスター会場でフラッシュトーク動画の上映は、実行委員長としての業務があって、会場で聞けなかった発表もポスターを見ながら動画で説明を受けることができて楽しかったです。

土日は、生協の食堂も閉まっていて学内で食事ができません。大学周辺は住宅街で、定食屋や喫茶店もほとんどありません。一乗寺までいけばラーメン屋は多いですが、行列店も多く、1時間程度の昼休みで食べるのは難しそうです。そこでランチョンセミナーを考えました。当初は昼休みに企業の方の商品説明なども考えていましたが、伝統意匠のシンポ企画ができましたので、多くの企業からの広告や出展による協賛金で昼食の提供ができました。お弁当の個数と単価設定には最後まで悩みましたが、実行委員の権野さんの采配で、京都らしさを出しながら、メニューの異なる和食と洋食を準備できました。多くの方に食べていただき、個数もほぼぴったりでした。私たちがやや体育会系であったため、ボリュームがやや多かったかもしれませんが、このあたりは今後の課題にさせていただきます。

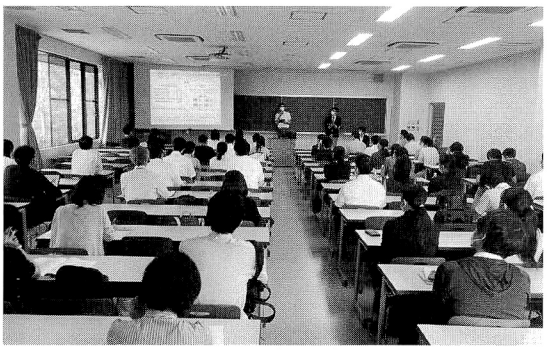
●最後に

実行委員長として準備段階で考えていたことは、(1) これまで知らなかった人にも大会や学会のことを知ってもらいたい。(2) 初参加の人に楽しんでもらいたい。(3) 会員で毎年参加して発表している人の対面交流の場を復活させたい。の3点でした。初日の交流会で初参加の方にマイクを回したり、写真やコメントを共有したり、参加してよ

かったなと感じてもらえるよう意識しました。これが達成できたかどうかは分かりません。今どきの用語を使うなら、KPIとして、新規参加者数、参加者満足度、そして、次の大会へのリピート参加者数あたりの確認が必要になります。そうです。第88回大会のチャレンジが、第89回大会、第90回大会への参加や学会誌への投稿など、長い歴史の学会にもし少しでも貢献することができたとするなら、大会開催としてこの上ない喜びです。

大会シンポ、共催企画、特別セミナー、特別体験ワークショップ、一般研究発表、自主企画、交流会、企業展示など全てについて私からのクロスロード記事には書ききれませんでしたが、他の実行委員の方の記事や学会誌の記事などありますので、これらの記録もご参照ください。

ポスター会場



フラッシュトークの様子

来田　宣幸（きだ・のりゆき）／ 2003年 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士（人間・環境学）。現在、京都工芸繊維大学基盤科学系教授。バイオメカニクス、運動生理学、スポーツ心理学などを守備範囲にしつつ、ファールゾーンのボールもがむしゃらに追いかけることをモットーに。

オンラインが日常を超えていく

大門　耕平
（東北学院大学）

応用心理学会第88回大会に実行委員及び発表者という２つの立場で参加させていただきました。多くの先生方によって支えられた研究大会であり、私の実行委員としての働きは、限られたものでありますが、学ばせていただいたことを報告させていただきます。

2022年５月、実行委員長である来田先生からお誘いを頂き、実行委員に加えていただきました。ただし、私自身、2022年４月より滋賀県から宮城県に転居しており、京都で開催される研究大会にどこまで貢献できるか心配が多くありました。京都に行かずにどれだけのことができるのか、何ができるのかと考えていました。

しかしながら、事前準備においては、物理的な距離はオンラインを利用することで解消されました。私が担当させていただいた学会発表の抄録を収集すること及びフラッシュトークで用いる資料をgoogle driveで共有し、Slackで閲覧ができるようにすることは、オンライン上で完了することができました。

学会が近づき、前日から京都に入り、前日準備から参加しました。やっと現場で顔を合わせて作業ができるという状態でありましたが、来田先生をはじめ、実行委員の先生方と集まるミーティングは少なく、そこでもオンラインが活用されました。前日準備、そして、当日の運営は、Slack、Zoom、メールでのやり取りによって進められていきました。常に、来田先生と実行委員がオンラインでつながっているという環境がありました。

物理的な距離を解消するためにオンラインを用いるというこれまでに持っていた感覚が崩され、コミュニケーションを強めていくためにオンラ

インを用いるという新しい視点を知ることができました。

また、発表者としての参加においても、フラッシュトークやSlackでの資料の共有及びコメントによって、これまでよりも多くの先生方からお声掛けを頂くことができたと感じました。

コミュニケーションを促進するツールとしてのオンラインが、単に物理的なものを超えるだけではなく、「いつもで相談することができる」「返答が即座にもらえる」という「つながっている」という感覚が人を強く支えるものであることを学ばせていただく機会でありました。対面かオンラインか、ではなく、その次にあるオンラインがあるからこそできる人と人とのつながりを感じることができました。貴重な機会に参加できたことに深く感謝いたしております。

大門　耕平（おおかど・こうへい）／ 1977年 滋賀県生まれ。京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科修了。博士（学術）。滋賀県にある学校法人ヴォーリズ学園近江兄弟社中学校の教員を経て、現在、宮城県にある東北学院大学文学部で勤務。中学校教育をフィールドとして、学際的な研究に従事している。

温かい雰囲気に感謝＋終わりなき旅を楽しみながら

寅嶋（桜井）静香
（京都工芸繊維大学）

今回、準備・運営側という立場で初めて参加させて頂きました。皆様、大変お疲れ様でございました。貴重な皆様のご発表を100演題近くお聞きすることができ、大変有意義な時間を共有できましたこと、改めて感謝申し上げます。

学会の雰囲気が、とても温かく…これまで参加したどの学会よりも、皆さんが活き活きとお話されていたように感じました。これも学会の特徴なのでしょうか？ (^^)

そして…皆さんへ学会開始前に送らせて頂いた私寅嶋のメッセージ…に対しても、これまた「温かい」お声を沢山頂戴致しました。…こちらこそ、みなさんの貴重な発表に触れることができて幸せでしたし、多くの学びを頂くことができました。その後もやりとりを重ねることができ…感謝の念に堪えません…本当にありがとうございました_(._.)_

お一人お一人、先生方の貴重な御発表は、それまでの先生方における研究時間の集大成であること、を改めて感じました。…どの分野で在ろうとも、結果～考察へ至るまでの思考錯誤…のプロセスは、誰にもはかり知ることができません。研究は時に苦渋の連続です。例えば実験系であると、失敗を繰り返すことは日常茶飯事で、理想の結果にたどり着かないこともしばしばです。観察研究においては、地道で長い旅路をいきます…このように研究は終わりがありません。この「終わりなき旅」を…皆さんと共に、より充実したものにしていきたいなと…改めて今回の温かな学会の雰囲気を拝見していて感じさせられました。

次年度はどんな会になるのでしょう？ この温かく穏やかな雰囲気が継続すると…嬉しいですね。みなさんの今後の益々の発展を祈念いたしまして、今回のご挨拶に代えさせて頂きます。貴重な御発表に携わらせて頂けましたこと、重ねて感謝申し上げます。

それでは、2023年度も楽しみにしています（…おっと、今度は自身が発表せねば!? (-_-;)）まずは「会員に」なります…☜え？ 会員じゃなかったの？ の突っ込み…もお待ちしております；笑）この度はご挨拶の機会を頂戴致しまして、誠にありがとうございました。

寅嶋（桜井）静香（とらしま（さくらい）・しずか）／ 2022年5月より京都工芸繊維大学研究員（Ph.,D）。近著に「バウンス運動の生理学的基礎～バランスボールで弾む運動の科学的分析～（ブックハウスHD, 2022年8月出版）」がある。

第88回大会を終えて

権野　めぐみ
（京都工芸繊維大学）

日本応用心理学会第88回大会の実行委員として、参加者の皆さまに京都らしさを感じていただけることを考えて準備に取り組みました。大会運営の中で私は主に備品の発注とエンタメ部門を担当しました。エンタメ部門という名称は勝手に名付けましたが、大会においてお楽しみ会的な部分の準備を行っていました。特に昼食と交流会のお菓子の準備に力を入れていました。

京都工芸繊維大学周辺に飲食店があまりないため、大会事務局で参加者の昼食を準備することにしました。まず、予算や感染症対策も含め、どのような食事をどのようなスタイルで提供するのが良いかを検討しました。そして、食事で京都らしさを感じていただきたかったので、京都で人気の仕出し屋さんを調査し、お店を選びました。お弁当の種類も１種類だと好みがあるため、和風と洋風の２種類準備することにしました。お店の方の提案で１日目と２日目のおかずの内容も変えていただけることになりました。最後の難関は発注数の決定です。お弁当は日持ちしないので過不足なく発注しなければいけません。大会の事前申込者数から来場者数の予測をし、最終的な発注数を決めました。結果的にお弁当は両日とも10個ほど余ったので予想は当たりの範疇ではないかと思っています。

交流会は楽しい雰囲気になればなと思いました。そこで、くじ引きやお菓子タイムを設けました。お菓子に関しても昼食と同様に京都の名菓を皆さまに味わっていただきたいと考えました。しょっぱいものと甘いもの両方を準備する、持ち帰り可能な品にするなどを考慮し、お菓子選びを行いました。阿闍梨餅は賞味期限が短いので、はじめは選定するか悩みました。お店に問い合わせ、日持ちを伺い、なるべく皆さまに新鮮なものをお届けするためにぎりぎりに購入することにしました。阿闍梨餅は特に好評であったため、選定してよかったなと思いました。

実行委員として第88回大会に携わることができ、さまざまな発注スキルが向上しました。そして何より楽しかったです。ありがとうございました。亜細亜大学で開催される第89回大会も楽しみにしています。

権野　めぐみ（ごんの・めぐみ）／ 2023年３月、京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科バイオテクノロジー専攻博士後期課程修了。専門はダンスおよびクラッシクバレエの指導法、動作解析。スポーツ障害早期発見のための測定評価法考案など。

第88回大会シンポジウムとランチョン企画を終えて

成田　智恵子
（京都産業大学）

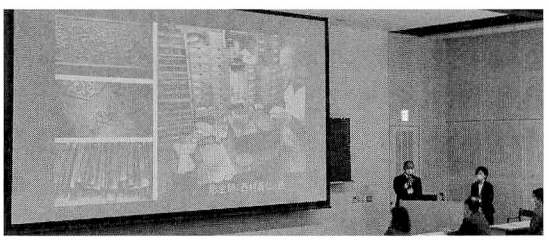
2020年以降、コロナ禍によって多くの学会大会が中止やオンライン開催を余儀なくされました。第88回大会の準備に携わり始めた時期も感染者数は一進一退の状況を繰り返していました。そのため、大会実行委員長の指示のもと、様々なパターンを想定した学会大会の準備が始まりました。大会が実際に開催されるまでは多少の不安もありましたが、今思い返してみますと、対面・ライブ配信・オンデマンド配信を駆使した第88回大会はまさに時代に対応した大会であったと思います。

今回は京都で開催される学会大会ということもあり、京都の地の利を活かしながら研究者主体の研究発表から一歩踏み出した場にするためにはどのようにしたら良いのかについて、大会実行委員会と事前に協議を重ねていきました。その結果、思い切って現役の伝統工芸士の方々にシンポジウムへのご登壇を依頼し、さらに工芸ワークショップの開催をお願いする運びとなりました。

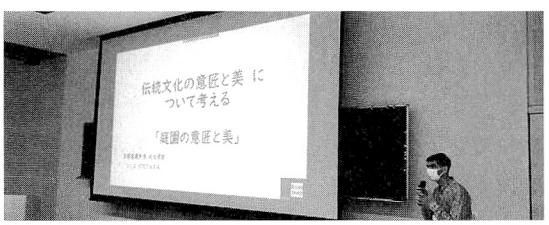
大会シンポジウム「伝統工芸の持続可能な未来へのチャレンジ：デザイン心理学とキャリア心理学の視点から」は、京都の職人の世界を心理学関係者の皆さまと是非共有したいと考えて企画しました。「今求められる伝統的なものとは？」「日本の伝統的な文化や技能継承の在り方、働き方とは？」「つくり手もつかい手も幸せになるような手仕事の在り方とは？」などの議題をデザイン心理学とキャリア心理学の視点から紐解くとともに、伝統工芸の持続可能な未来へのチャレンジについて議論しました。

また、ランチョン企画「伝統文化の意匠と美について考える」は、大会会場である京都工芸繊維大学が近代以降の京都のものづくりやデザインを支え、ともに歩んできた歴史を持つ大学であることに因んで企画しました。庭園、工芸、民芸の専門家を交えて「各分野においてどのような意匠や美が人々を魅了してきたのか。そして、魅了し続けるのか」について、伝統文化の背景にある文化的あるいは産業的な意味付けを踏まえながら議論しました。

手探りの状態で始めたシンポジウム・ランチョン企画ではありましたが、無事に終えることができ、安堵しております。お忙しい中ご協力いただきました下出祐太郎氏、西村眞仁氏、西川博之氏、吉岡尚美氏、小西歩氏、西村純一氏、マレス・エマニュエル氏、原田喜子氏、下出茉莉氏、実行委員会の皆さま、そして大会に関わられた皆さまにこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



職人シンポジウム



伝統意匠シンポジウム

成田 智恵子（なりた・ちえこ）／ 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科先端ファイブロ科学専攻博士後期課程修了。博士（学術）。現在は京都産業大学文化学部助教。専門は伝統工芸、技能継承、高分子材料。

シンポジウム：心理学を市民生活に生かしてもらうには
～“事故予防の話”に人々を振り向かせる試行錯誤

篠原　一光
（大阪大学）

本シンポジウムは日本認知心理学会安全心理学研究部会との共催で開催されました。この部会は、認知心理学的な観点から安全に関する問題に取り組むという趣旨の研究部会で、応用心理学会との親和性が高く、著者を含め両方の学会に加入している会員を含む研究会です。

本シンポジウムでは大阪大学大学院人間科学研究科の特任研究員である岡真裕美さんが話題提供をされました。岡さんはご自身の夫を水難事故で亡くすという経験をお持ちで、その後大学院に入学して子どもの安全に関する研究に取り組み、修了後には事故予防に関する啓発や情報発信活動を展開しておられます。シンポジウムでは、ご自身が経験した水難事故の内容と事故発生後に生じた行政・教育機関とのやり取りの経験、その後の大学院での研究活動の中で開発され2014年から実施している安全教育プログラム「ひなどり」について、さらには各所で安全啓発活動を行う中で経験された種々の興味深い出来事を紹介していただきました。安全啓発への参加を促進するための工夫、効果的に啓発を行うためのテクニックなど、実際に「現場」で活動する人ならではのイベントでの体験や、子どもの視野を疑似体験するチャイルドビジョンの活用を紹介されたのが印象的でした。また、指定討論者（京都大学・田中真介先生）や会場やオンラインでの参加者との間でも活発な意見交換が行われました。

安全心理学では、事故や危険な事象の発生メカニズムの解明という学術的研究のみならず、研究に基づいた防止対策を提案・実現していくことも重要な使命といえます。しかし実際場面での教育・訓練・啓発活動には研究とは異なる難しさがあり、成果を上げることは容易ではありません。本シンポジウムは実際場面で活動される方の経験を共有し、実際場面でよりよく活動することの一助となることを期待して企画しましたが、このような企画は、理論と実践の両方を行い、現実社会と向き合うことを迫られる応用心理学諸領域の会員にとって有用なものだと考えています。

チャイルドビジョンの実演

篠原　一光（しのはら・かずみつ）／ 大阪大学大学院人間科学研究科教授。博士（人間科学）。専門は認知心理学、交通心理学、人間工学。特に自動車運転者の認知と注意に関する研究、運転適性としての認知機能の研究に従事している。

特別セミナー「心理学の「食」への展開と応用」

西崎　友規子
（京都工芸繊維大学）

企画・司会：西崎友規子（京都工芸繊維大学）
講　演　者：和田有史（立命館大学）

「食」は、私たちの日常生活に深く溶け込んだ、あまりにも当たり前の行動のひとつです。どんなに時代が変ろうとも、人間の営みに切っても切り離せない行動であり、社会の具体的な問題解決に資することを目指す応用心理学にとっても、重要なテーマのひとつに違いありません。しかし、ここ最近の学会大会で、「食」をテーマにしたシンポジウムやセミナーの開催は実現されていませんでした。

情報技術の進展によって、研究手法や解析手法が発展し、また、学際的な研究が飛躍している現在、改めて、心理学と食との関わりを考えることによって、学会員の皆様にとって新たな刺激が得られるのではと考え、本セミナーを企画しました。

和田先生は、基礎心理学をバックグラウンドとし、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構を経て、現在は立命館大学でも第一線でご活躍し、今後も長く、食の心理学研究を牽引されていかれる方です。

ご講演では、基礎心理学の知見や技法を駆使した「食品の素材感における視覚情報の有効性」、「風味特徴と視覚情報を対応づけた風味の視覚化技術」、「味覚と嗅覚コーディングの関係による疑似的な嗅覚経験の可能性」、「食品安全に関する正しいリスク教育」など、他分野とのコラボレーションを含んださまざまなトピックスについて、お話しくださいました。これらの研究は、工学などの他分野からだけでなく、行政からも信頼を受ける、基礎心理学の確かな理論や技法に基づいており、応用研究の土台になるのは「オーセンティックな心理学」であることを強調されました。「確かなサイコフィジックス、確かな心の計測を礎に、心理学は科学・技術と融合し、応用心理学が発展していく」という、大きなメッセージを残してくださいました。研究課題の設定の仕方や、他分野との取り組み姿勢についても、非常にたくさんの刺激をいただけたご講演でした。

西崎 友規子（にしざき・ゆきこ）／ 京都工芸繊維大学准教授。博士（学術）。産業技術総合研究所研究員、日産自動車（株）総合研究所を経て、2015年より京都工芸繊維大学情報工学・人間科学系専任講師、2020年より現職。専門は、認知心理学、認知工学。

幼児期・児童期・青年期の自己信頼性の発達診断と保育・療育

田中 真介
（京都大学）

●企画の趣旨

この自主企画ワークショップでは、自閉症療育・乳幼児保育・小中学校教育の実践に携わってきた３名の演者から基礎研究と実践研究の成果の報告を受けました。それをもとに、自己信頼性（自分自身の価値を発見し尊重する力）と社会的交流性（自分と世界との絆を結び、つながりをつくる力）の発達を大切にした新たな保育・教育の方法について自由に討議することができました。報告の概要を紹介します。

…

●報告１：自閉症療育

塚田直也「自己信頼性を尊重した教育の意義 ～自閉症児童への療育実践を通して～」

塚田は筑波大学附属久里浜特別支援学校の幼稚部と小学部で、自閉症療育に取り組んできた経験から、自閉症幼児３名の事例を報告した。

A児（生活年齢CA 3:1、発達年齢DA 1:7、自我の誕生期）は物を壊し人を叩くなどの傾向が強かった。気持ちに共感して「自他の価値の実感」を援助し、本児の言葉を模倣し再現（ミラーリング）して自己理解を援助。B児（CA 6:8、DA 1:9、自我の拡大期）は、働きかけに強く拒否する力を示した。社会的価値（好きな絵本や歌）を共有する遊びを通して「気持ちを受けとめてもらう心地よさの実感」を援助した。C児（CA 11:1、DA 5:8、自励心・自制心の形成期）は思いを率直に表現できず、気持ちの揺らぎを抱えていた。嫌だと思うことを歌詞にした「嫌いの歌」を作って一緒に歌い、多彩な価値を理解し自己表現に生かせるよう援助することで遊びが発展していった。

自己信頼性の発達を尊重した教育によって、人や物との関わりや自己表現が豊かになり、破壊や拒否などのネガティブな行動は減少する。自我の誕生期（0:10～2:0頃）には、子どもの行為を意味づけて共感的に受けとめ、自他の価値を実感していく。自我の拡大期（1:6～3:0頃）には、自分を多様な場面で発揮し受けとめられて自他を尊重する力を育む。絵本や音楽を楽しみ道具を多彩に利用して世界を拡げ、自己理解を深める。自励心・自制心の形成期（3:0～6:0頃）には、多様な価値観に触れて自分を多面的に認識し（自己多面視）、自分自身の変化をとらえ（自己形成視）、相手の内面を理解して自励心・自制心が発展して新たな自己信頼性が育まれる。

●報告２：幼児期の発達と保育

横井川美佳「幼児期の自己認識と手指操作の関連性 ～自画像描画による自己信頼性の発達評価～」

横井川は児童発達支援の療育実践経験をもとに、３～６歳の幼児56名を対象として、自画像を手がかりとして、自己信頼性と手指操作機能との関連を考察した。京大で新たに開発した「握り圧計」を用いて手指操作の水準と特質をとらえた。両手にゴムバルブを持ってもらって「踏み切りカンカンしようね」と促し、３つの条件で交互把握させた。①モデルありで１秒ごとの切換え、②モデルありで２秒ごとの切換え、③モデルなし。

交互開閉の把握圧の変動の定量解析から、モデルなしで自分で開閉操作をイメージしながら自律的に行う交互開閉の水準が自己認識（自画像の評価点）と有意に関連した。自分自身への信頼性を深めて自己認識の発達を援助することで手指操作

などの個別的な諸機能が形成される。自我の育ちを支え、自己信頼性の力を育むためには、提示されたモデルに合わせた受動的な活動でなく、子どもたち自身が自発的・能動的・主体的に取り組む活動が重要であることが示唆される。

●報告3：思春期の発達と教育

本原琴美「思春期での自己信頼性と社会的交流性の発達と教育 ～自己認識と精神健康度の関連性～」

本原は沖縄県の小中学校での特別支援コーディネーターとしての教育実践をもとに、思春期の児童・生徒理解での自己信頼性の大切さを提起した。小学3～6年生と中学1～3年生286名を対象として「一般健康調査（GHQ-12）」で健康度を調査し、「自己理解アンケート」（20答法、3つの願い、小さい頃の思い出、この学年での成長と印象、将来の大人像、好きな歌、感想）によって社会的・関係的（空間的）及び発達的・形成的（時間的）な自己認識の内容をとらえた。

精神的健康度は小3、4で高く、小5は低い傾向。中学生は小学生より全体として低く、特に中3は最も低い健康度を示した。特に「有能度・信頼度」で不健康と自己評価した事例が多かった。自分への自信のなさ、感情表現の揺れが顕著だった。

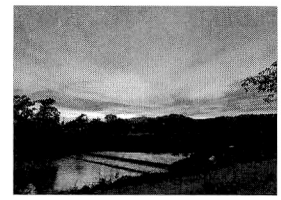
全体として健康度が高いほどポジティブに自己理解していた。小5女子は自己理解のネガティブ率も高く、健康度の低さと相関していた。日常生活を楽しく過ごせている場合には、健康度が低くても自己理解のポジティブ率が高かった。中学女子では健康度が顕著に低い事例がみられた。将来展望に揺らいでいる一方で、社会的自立モデルとしての「あこがれの人」との出会いを求めていた。

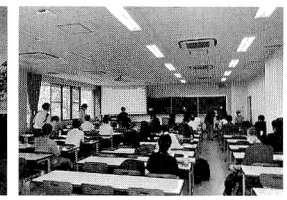
思春期には、新たな自己信頼性が育ち、仲間との共同の活動を通じて自他や社会に共通する普遍的な価値を発見し相互に尊重し共有していく。自己理解を深めて自分自身の存在と価値を実感し、それが精神的な健康を支える。実感を持って友だちと交流する経験を通じて自己理解を深めていく援助を行っていきたい。

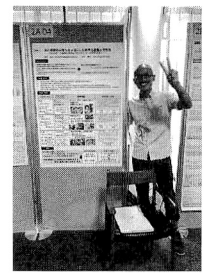
…

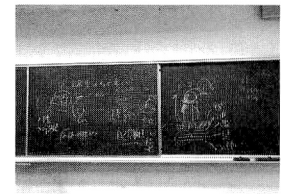
●おわりに

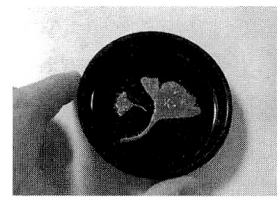
「自己信頼性」と「社会的交流性」の発達に焦点をあてた新たな教育方法を多彩に考える貴重な機会となりました。ご参加ありがとうございました。


鴨川の夕暮れ


フラッシュトーク会場


ポスター会場（塚田さん）


自主企画ws（企画の趣旨）
田中板書


伝統工芸

鴨川の夕暮れ 2

田中　真介（たなか・しんすけ） ／ 発達論、神経科学、発達診断学を専攻。京都大学教養部、総合人間学部等を経て2013年より現職（京都大学国際高等教育院准教授）。大学院人間・環境学研究科（共生人間学専攻）を兼担。乳幼児期から児童期・青年期・中高齢期の発達研究とともに、ワクチン接種による医療被害やメチル水銀系農薬による健康被害の研究に携わっている。著書に「雨の日の動物園」「モロッコの猫をんな」「トランジット・ゾーン」（京都大学新聞）、「Slow Walkers」（季刊発達）、「発達がわかれば子どもが見える」（ぎょうせい）、「生きることの意味」「医療被害」（応用心理学事典、丸善）、「発達の基礎を学ぶ」（全障研出版部）、「新型コロナワクチン～知っておきたい副作用と救済制度のこと～」（コンシューマネット・ジャパン）などがある。

企業における心理データを活用した応用研究 ～心理学とAIのコンバージングテクノロジー

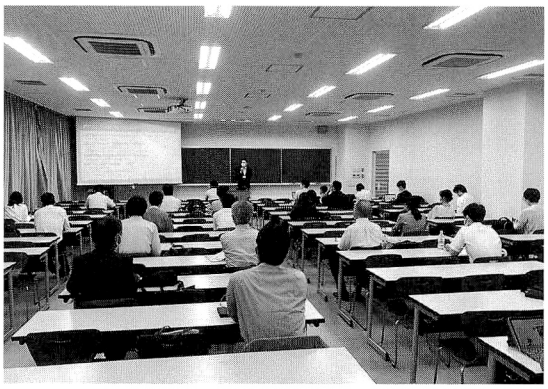
紺野　剛史
（富士通株式会社）

はじめに、歴史ある日本応用心理学会において、自主企画発表を行う機会を頂きありがとうございます。心理学関連での学会発表は初でしたので、至らぬ点も多かったかと思いますが、大会後にお褒めのメールを頂きまして、今では企画してよかったと感じております。

富士通は、多様で複雑な社会課題の解決に向け、人文社会科学等の多彩な知見とデジタル技術（AI）を融合した、コンバージングテクノロジーの研究を行っています。自主企画発表では、企業における心理データを活用した応用研究と題し、これまで富士通が研究してきたコンバージングテクノロジーの３つの事例紹介と総括を行いました。

ヘルスケア関連は、コロナ禍におけるリモートでの認知症ケアに焦点を当て、富士通と順天堂大学が共同で研究を行っています。富士通の陽奥シニアリサーチャーは、芸術作品を創造することで心身の健康回復を目指している芸術療法において、臨床美術士が経験的・定性的に評価されていることに着目し、顔表情解析技術を活用することで定量的な評価を行う研究について報告しました。順天堂大学の沢田氏は、オンラインによる運動療法が継続しない問題について、参加者への最適な運動誘導を目指し、顔表情解析技術から主観的な運動強度を推定する研究について報告しました。スマートシティ関連では、社会問題となっている特殊詐欺被害に焦点を当て、富士通、東洋大が日本初の共同研究を尼崎市で2022年から開始しています。富士通の近野プリンシパルリサーチャーから、ミリ波センサ、ウェアラブルセンサなど複数のセンシング技術を組み合わせて使用することで、還付金詐欺などの特殊詐欺電話を受けている高齢者の複雑な感情を分析可能にする研究について報告しました。総括として、東洋大の桐生教授から、応用研究の効果的な進め方や、企業とアカデミックの連携について貴重なお話をして頂けました。

最後になりますが、応用研究をしっかりと研究している学会はあまりないですので、今後も継続して学会発表を行いたいと思っています。また、来年度も同様の自主企画発表を行いたいですので、是非、産学連携事例などありましたら、私までお気軽に問い合わせて頂けますと幸いです。



紺野　剛史（こんの・たけし）／ 富士通株式会社 コンバージングテクノロジー研究所 リサーチディレクター。AIと人文社会科学の融合研究に従事。2021年度 人工知能学会現場イノベーション賞。2022年度 日本応用心理学会優秀大会発表賞。

研究発表を終えて

日向野　智子
（東京未来大学）

長引くコロナ禍の2022年９月、対面・オンライン同時開催の第88回大会にて、「保育現場における職員間コミュニケーションを円滑にするための工夫」について発表させていただきました。同会にて名誉会長に承認された角山剛先生を含む５名での共同発表（JSPS科研費18K18672）です。

研究では、保育施設の園長10名に半構造化面接を行いました。逐語分類の結果から、保育上の連携強化とチーム保育に取り組みながら、組織的に職員間の連携やコミュニケーション向上を目指していること、職員間あるいは園長と職員との関係性の強化、問題対処や個人の資質向上から、園長個人として職員間の連携向上や良好なコミュニケーションを目指していることが示唆されました。園長自身はこのように捉えていますが、現場の保育士も同様に捉えているのか、園長と職員双方の観点から検討することが今後の課題です。会場では、私どもの発表に貴重なご意見をいただきありがとうございました。また、皆様のご発表に触発され、対面にて意見を交わし、ふれあうことの大切さを実感した大会になりました。

大会実行委員会の皆様におかれましては、コロナ禍での健康管理に感染症状況の注視、そのうえ台風まで襲来し、大会終了まで気の休まらない日々であったことと思います。Slackによるポスター公開やフラッシュトークの導入、一人一人にポスターコメントや発表画像をつけてくださるなど、実行委員会の皆様のチャレンジングな大会運営と細やかな工夫の数々に驚くばかりでした。お恥ずかしながら、「フラッシュトークってなんだ？」から始まり、「フラッシュトークとポスター発表の２回やるの？」と、当日まで右往左往しておりました。ふりかえれば、立派な大教室で緊張しつつ順番を待ったこと、フラッシュトークの壇上からみた会場の光景は、とても印象深く記憶に残っています。コロナ禍での対面・オンライン同時開催はさぞご苦労が多かったことと思います。素晴らしい大会を企画・運営してくださいました第88回大会実行委員会の皆様に、厚く御礼申し上げます。

日向野　智子（ひゅうがの・ともこ）／ 昭和女子大学大学院修了。博士（学術）。立正大学心理学部特任講師を経て、2013年より東京未来大学こども心理学部勤務。近年は、保育士のストレスやコミュニケーションスキルについて研究している。

研究発表を終えて

松本　友一郎
（中京大学）

本大会を振り返ると、新しい試みがたくさん盛り込まれていたという印象が強いです。発表者として特に心に残ったのは、初めて経験したフラッシュトークです。当日の朝食前、何度試しても持ち時間の１分に収まらず、困り果てたことが昨日のように思い出されます。ただ、それは、自分の研究をまったく知らない人に魅力をどう伝えるかが試されているようにも思われ、改めて自分のアイデアについて意義を捉え直す機会になりました（朝食はしっかり食べ、本番では何とか１分に収まりました）。参加者としては、どの発表を聞きに行くか考える手がかりとして、皆様のフラッシュトークを聞かせていただいておりました。特に、本大会は論文集の発行が大会の開催よりも後でしたので、このフラッシュトークがとても役に立ちました。他にも様々な取り組みをされた実行委員会の皆様、スタッフの皆様に感謝を申し上げます。

私自身の発表内容についても少し触れさせていただきます。私は主に組織心理学を専門としており、特に職場内の対人関係について検討しております。職場の課題として、成員が組織内の問題について思うことがあってもそれを口にしないsilence（沈黙）があります。本大会では、silenceの発生過程について検討した結果を発表しました。具体的には、新卒社会人を対象とした自己報告の縦断調査により、入職時に推測された就職先の職場における行動規範が入職1年後の本人の行動と考えに及ぼす影響を検討しました。分析結果では、「自分が忙しい時に他の仕事を断る」という行動に対する賛意が職場では低いと入職時に推測されるほど、1年後にはそれに沿った行動がとられていることが示され、仮説は支持されました。しかし、調査票に入れていた他の行動規範の結果はすべて異なり、いずれも仮説は支持されませんでした。そのことについてもフラッシュトークで触れたところ、ポスター発表の際にいろいろなご意見をいただくことができました。先にご意見をいただきたいポイントをお伝えできるという点はフラッシュトークの大きなメリットであったと思います。

以上、本大会での発表を振り返らせていただきました。本稿が今後の大会運営や発表等に何らかの形で貢献できましたら幸いです。

松本 友一郎（まつもと・ともいちろう）／ 中京大学心理学部応用心理学領域教授。専門は組織心理学、社会心理学。大阪大学人間科学研究科助教、中京大学心理学部講師、准教授を経て現職。

研究発表を終えて

笠置　遊
（立正大学）

日本応用心理学会第88回大会（於・京都工芸繊維大学）は、私にとって2年ぶりの対面での学会参加であり、また、実は初めての日本応用心理学会大会への参加でした。そういった意味で、参加まで非常に緊張していたのですが、大会実行委員会の皆様が細かなところまでご配慮くださり、大変有意義な時間を過ごすことができました。

今回の大会は、COVID-19がまだ収束していない状況でしたので、対面とオンラインのハイブリッド型での開催となりました。ハイブリッド型といっても様々な方法がありますが、本大会では参加者専用のSlackが開設され、オンラインでのやりとりは主にここで行われました。発表者ごとのチャンネルが設けられ、発表者の抄録やスライドについて参加者同士が自由にチャットできるように設定されていました。こういったオープンな場ですと、人目を気にしたり、互いに遠慮してしまったりして、ディスカッションがいまいち盛り上がらない…というパターンになりがちです。しかし、本大会では、大会実行委員の方々が全発表者の抄録やスライド1つ1つに対して、心のこもった丁寧なメッセージや質問を率先して書き込んでくださったので、参加者も気軽に書き込みやすくなり、スムーズなディスカッションが可能となっていました。大会開催直前は非常に忙しい時期ですのに、このような対応をしてくださることに感激いたしました。

さて、私は「マスクの着脱が顔の魅力評価に及ぼす影響」というタイトルでポスター発表をさせていただきました。COVID-19感染拡大の影響を受けたこの2年間、新しく出会った相手の素顔（マスク非着用）を見たことがないということは珍しくありません。私自身、マスクを着用した顔しか見たことのない学生がふとマスクを外した際に、イメージしていた顔とのギャップで驚くことが多く、そのような体験から今回の研究を実施いたしました。参加者に、同一人物のマスク着用・非着用顔を連続して呈示し、魅力を評定させたところ、マスク着用顔→マスク非着用顔を提示された条件で魅力評価が低下すること、そしてマスク

非着用顔→マスク着用顔を提示された条件で魅力評価が上昇すること、さらにこのような現象は目元の魅力が高い顔で顕著にみられることが示されました。結果の解釈について対面でもオンラインでも多くの先生方からご助言をいただき、次の研究への道筋が見えてきました。また、ポスター会場には参加者同士が交流する空間が設けられていて、質疑はもちろん、思いがけずお会いできた方ともお話しすることができ、対面学会の良さも改めて感じられました。

大会委員長の来田宣幸先生はじめ大会実行委員会の皆様、オンラインでも対面でもスムーズにコミュニケーションできる場を作ってくださったこと、本当にありがとうございました、そしておつかれさまでした。また、大会参加について振り返る機会をくださった広報委員の谷口淳一先生にも感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

笠置　遊（かさぎ・ゆう）／ 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。現在、立正大学心理学部准教授。専門は社会心理学。

研究発表を終えて

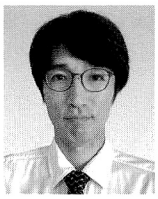
下田　麻衣
（京都ノートルダム女子大学）

2022年9月17・18日に日本応用心理学会第88回大会（京都工芸繊維大学）に参加させていただきました。まだ新型コロナウィルス感染症が完全には収束していないなか、対面とオンラインの両方で開催できるようきめ細かな心配りで準備を進めてくださった第88回大会実行委員会および関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

第88回大会実行委員長の来田宣幸先生がご挨拶のなかで「対面による濃いコミュニケーションとリモートによる気楽なコミュニケーションを両立させる大会にしたい」とおっしゃっていましたが、本大会ではそれを実現するためのさまざまな工夫がありました。特に、発表者が発表内容を1分間で紹介する「フラッシュトーク」はとても興味深いものでした。個人的な経験談で恐縮ですが、今まで学会で研究発表を見に行く際は、まずプログラムを見てどのような研究発表があるのかをチェックし、限られたスケジュールの中で自分が関心のある研究発表を順々に見て回ることが主でした。この方法も決して悪くはないのですが、自分の注意や関心から外れている領域やテーマから新たな発見をするには適していない部分もあります。しかし、本大会で実施されたフラッシュトークでは、同じ時間帯のセッションにどのような研究発表があるのかを効率よく把握することができました。参加者側は、フラッシュトークをチェックすることで、プログラムだけでは注意が向かなかった研究テーマに目を向けることができます。私自身もフラッシュトークで新たな研究領域について知ることができ、その後の研究発表で貴重なお話を伺う良い機会となりました。フラッシュトークはリモートでも配信されていましたので、オンラインで参加されている方々にとってもいつも以上に好奇心や興味が刺激されたのではないかと思います。また、発表者側にとっては、フラッシュトークが研究発表の良い予行練習となり、緊張をほぐすきっかけになったかもしれません。フラッシュトークの他にも、質疑応答のツールとしてSlackを用いていた点も円滑なコミュニケーションを可能にしていたと思います。Slackによって、オンラインや対面といった参加形態にかかわらず発表者や参加者が気軽に議論することができました。以上のような画期的なコンテンツにより、参加者として、そして発表者として大変充実した時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

下田　麻衣（しもだ・まい）／ 東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程修了。博士（社会心理学）。現在、京都ノートルダム女子大学現代人間学部心理学科講師。

初研究発表



伊藤　将史
（近江兄弟社高等学校）

発表を終えて感じることは、研究している段階の時、そして発表の準備をしている時は１人で進めていたわけでもないこともあり、このことがどういう発表になるのだろうと実感がないまま準備をしていたということだ。さらに、これまでに発表の現場にも参加したこともなかったので、一体、どんな人が参加するのだろう、参加した人たちはどんな研究をしているのだろうとわからないことだらけのまま発表当日を迎えた。

午前はフラッシュトーク。自分が話をすることよりも、他の方々のことにとても興味があった。大学の先生や大学院生だけでなく、企業の方もいることに驚いた。働いている人が研究をして発表をしている。そのことに企業も必要性を感じているからこそ成り立つものであって、実践に注目が集まる傾向が強い学校現場との違いを感じ、不思議な感じがした。また、皆さんの研究テーマにも興味があった。普段、自分が気にもしていなかった視点や知らない世界の視点など、様々なテーマがあった。そして、研究過程も感心するものがあった。

午後からの発表。数名の方が興味を持って研究の内容を聞いてくれたり、質問してくれたり。そんな過程を過ごしていると、自分がクラブ活動において試行錯誤しながらやってきたことに少し誇りを持つことができているように感じた。しかもそれは優勝とか全国出場という結果に対してではなく、活動の過程において興味関心を持ってくれているということが何よりも嬉しかった。優勝を目標にしていると、準優勝では残念だったと終わってしまう活動になり、私自身も優勝させてあげられなかったことに反省することがある。しかし、生徒たちの活動の過程に注目し、評価していくことが大切なんだと改めて気づくきっかけにもなった。また、今回、自分が有意義な取り組みをしていると感じたことを生徒へも共有することで、クラブの一員である生徒たちが自分の活動に誇りを持ってくれるようになると良いなとも感じた。

決して、自分だけでできた事ではない。来田先生、山本先生、そして大門先生を始め多くの方が興味を持って、関わってくれたことでできたことである。全てのことに感謝しかない。本当にありがとうございました。さらに、この年（現在48歳）になって、知らない世界に自分の身を置くことのワクワク感や気づかされたことは、これからの自分の大きな財産になると感じた。

伊藤　将史（いとう・まさし）／ 1974年 愛知県生まれ。滋賀県にある近江兄弟社中学校、高等学校で保健体育科の教員として過ごし17年目になる。高校では女子バレーボール部の監督としてインターハイ、春の高校バレーに出場する。

研究発表を終えて

富田　瑛智
（帝塚山大学）

2022年度になりコロナ禍は続くものの、いくつかの学会では一部対面で開催されることが増えてきました。その中でも、日本応用心理学会第88回大会はとても印象深い学会でした。そのような大会の振り返りの機会をいただきまして、広報委員

会の谷口先生、森泉先生、誠に感謝申し上げます。

まず、本大会の開催方法を確認した時、参加をためらったのを覚えています(申し訳ありません)。コロナ禍の2年間の経験は私の感覚を大きく変えていたようで、オンライン開催だといいなと思っていました。オンラインでも、思ったよりコミュニケーションができ、研究室から参加できるため追加資料の提供や、疑問点をすぐ調べられるなど、多くの利点があると感じていました(発表を聞く際に、よれよれのジャージでも、お菓子を食べながらでも問題ないのはとても良かった)。対面よりもオンライン開催の方が良いのではないか、という気持ちが強くなってきたころに本大会がハイブリッドで開催されると知り、参加を少し躊躇していました。

しかし、本大会は対面で参加してよかったと思える学会でした。結論から言うと、オンラインと対面がうまく併用されており対面で参加してもオンラインと対面の両方のメリットを享受できる学会だったと感じました。例えば、発表時間が重なって話を聞くことができなかったポスター発表はオンラインでフラッシュトークやポスターを確認でき質問もできる、シンポジウムなどは別の会場でも投影されており、会場が一杯でも話を聞けるなどがありました。本大会はオンラインのメリット、対面のメリットの両方を感じられる非常に良い学会でした。

私の発表は高校性のソーシャルメディア利用とそのリテラシー教育に関する内容でした。ソーシャルメディアの種類は多く、さらに栄枯盛衰が激しいため、教育者側の学習が追い付かずリテラシー教育が困難になっています。本発表ではソーシャルメディアを実際に利用している高校生や大学生が教育者となり、自身の失敗経験などに基づくリテラシー教育を同学年や下学年に実施した結果を報告しました。

最後になりましたが、大会実行委員長の来田宣幸先生、並びに実行委員の皆様方、本大会の開催にご尽力いただきました皆様に感謝申し上げます。

富田　瑛智(とみた・あきとし)／大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。筑波大学システム情報系助教、大阪大学大学院人間科学研究科助教、関西国際大学心理学部講師などを経て、帝塚山大学心理学部准教授。好みと飽きについて研究している。

研究発表を終えて

小倉　有紗
(大阪大学大学院)

このたび、「現場作業員への効果的な情報発信に関する検討」というタイトルで発表をさせていただきました。労働現場で事故等が発生すると、その情報を社内に周知し、再発防止に努めることが求められます。その際、「こうした情報をどのように提供すれば、将来それを活かして事故のリスクを発見できる可能性が高まるか」について検討することは有意義であると考えられます。今回の発表では、自分に関連付けることで記憶が促進される「自己参照効果」に注目しました。日常的に遭遇し得る小さな事故の事例を提示し、約1週間後に想起させるという現実場面に近い条件で実験を行い、事例の提示の際に自己参照を促す場合とそうでない場合を比較しました。結果、自己参照効果が確認できました。

発表した内容について、ポスター会場やSlack上で複数の質問やコメントをいただきました。現在、発表内容の後続の研究を行っておりますが、こうしたやりとりが実験計画を考える上で大きな助けになりました。特に、ポスター会場での質疑では、やりとりの中で議論が深まり新しい質問や気づきにつながるということを経験しました。コロナ禍以降、従来型の対面のポスター発表は初めてだったのですが、このような“リアル”な場での議論が学会の醍醐味であると再認識しました。

今回の大会で特筆すべきは、なんといっても「運

営の工夫」であると思います。「フラッシュトーク」では、普段なら足を運ぶことがなく、抄録もチェックしないようなセクションの発表についても雰囲気を掴むことができ、自分の研究のヒントも得られました。発表風景の写真を事務局の方がSlackにアップロードしてくださったのも有難かったです。その他、「ハイブリッド開催」という形態を最大限に活かす工夫が随所に感じられました。コロナ第７波の不安定な状況が続く中、このような進取性に富んだ大会を実現してくださった実行委員会の皆さま、本当に有難うございました。また、このような振り返りの機会をくださった広報委員会の皆様に、感謝申し上げます。

小倉　有紗（おぐら・ありさ）／ 2008年 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了。同年 西日本旅客鉄道株式会社入社、2018年から同社安全研究所所属。現在は大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程（社会人課程）に在籍中。

研究発表を終えて

金山　英莉花
（同志社大学大学院）

はじめに、第88回大会について振り返る機会をいただきましたこと、感謝申し上げます。

私は2020年に大学院修士課程に入学し、コロナ禍とともに院生生活がスタートしたため、対面を含むハイブリッドで開催される学会には今回初めて参加いたしました。さらに、応用心理学会での発表も今回が初めてでした。様々な研究に取り組む方々との交流は、ハイブリッド開催の学会だからこそ実現できたことだと思います。そして、応心で初めて発表する会員を懇親会で紹介してくださったことで、当日は緊張が解け、アットホームで温かい雰囲気の中で発表させていただくことができました。また、本大会では特別体験ワークショップで蒔絵を体験させていただいたり、大会シンポジウムで職人の方からのお話しをお聞きしたりと、今まで触れたことが無かった初めての体験をたくさんさせていただき、本当に充実した２日間でした。

本大会では「絵本の読み聞かせにおけるマザリーズと年長児の物語産出の関連」というタイトルで発表させていただきました。マザリーズとは、養育者による乳幼児への語りかけ方であり、高めの声でゆったりと大きな抑揚があることが特徴です。これまで、親子のコミュニケーションにおいてマザリーズで語りかけることの重要性が報告されたり、子どもの発達にも良い効果があったりすることがわかってきました。マザリーズの更なる効果を検討するため、本研究では子どもが自分で想像してお話しを作る物語産出に着目しました。

コロナ禍のため、zoomで親子に研究参加をしていただきました。対面実験よりもお子様とのコミュニケーションが難しかったり、ネット環境が不調になったりという苦労はありましたが、実験室に来室していただく必要がないためご家庭で気軽に参加していただけること、普段絵本を読み聞かせしている環境とほぼ同じ環境で実験できることなど、様々な発見がありました。発表当日は、たくさんの方が聞きに来てくださり、貴重なご意見をくださいました。心より感謝申し上げます。今後もより一層精進し、研究を進めて参りますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

ポスター発表時

金山 英莉花（かなやま・えりか）／ 2022年 同志社大学より修士（心理学）取得。現在は同大学院博士課程（後期課程）に在籍している。専門は発達心理学、乳幼児心理学。研究テーマは乳幼児の歌唱や絵本あそびについて。

研究発表を終えて

山田 昂暉
（帝塚山大学大学院）

今大会は私の日本応用心理学会での初めての発表となりました。学会発表自体が初めてということもあり、とても緊張していましたが、様々な領域の先生方の研究やお話を知ることができ、私自身にとって大変刺激的で貴重な時間となりました。

私が今回発表させていただいたのは、「嫌いな人物への対処行動とその後の感情の検討―嫌悪人物との関わりの程度による相違―」というタイトルでした。発表内容として嫌悪している人物の特徴と対処行動との関連、その人物との関わりの程度による対処行動とその後の感情の関連を調べるものでした。結果、対処行動はその特徴によって違いがあるということがみられ、場面間での対処行動と感情の方では、どの場面でも「表面的な付き合いにとどめる」といった「妥協」をすることでポジティブな感情を高めたり、ネガティブな感情を低めるということがみられました。無用な対立を避けようとしたり、今後の関係性を危惧することで「妥協」という対処行動を適切な行動として行ったのだろうという結果でした。

今回フラッシュトークとポスター発表での参加ということで、特にフラッシュトークは私にとって初めての経験でした。そのため１分という短い時間で少しでも先生方にご興味を持っていただくために、自身の研究を簡単に発表するというのは少し試行錯誤する時間がありました。当日は私の研究に誰か注目していただけるのかと不安になりましたが、ポスター発表では、多くの先生方がポスターの説明を求めてくださり、多数の質問やコメントを頂くことができました。ご興味をお持ちくださった先生方からのアドバイスは、自分の気づかなかった部分もあり、これからの研究活動への励みとなりました。このような学外の先生方から評価していただける機会は大変貴重であり、私自身の成長を促す良い経験だったと感じています。

最後に、このような貴重な振り返りの機会をいただき、大変感謝申し上げます。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

山田 昂暉（やまだ・こうき）／ 京都府出身。2022年、帝塚山大学心理学部卒業。現在、同大学院にて心理科学研究科博士前期課程の大学院生として在籍している。研究テーマは対人嫌悪。

教育発表を終えて

種ケ嶋 尚志
（日本大学）

日本大学スポーツ科学部スポーツ心理学ゼミナール３年生が、日本応用心理学会第88回大会の教育研究発表に参加させていただきました。コロナ禍での大学の学びはONLINEを中心とした活動ばかりでしたので、京都での対面での実施は学生らに対しても、多くの刺激を感じえる場になり得たのではないかと感じました。

近年、文科省からは大学教育におけるアクティブ・ラーニングの推進が叫ばれております。ゼミナールの活動自体は、能動的な学修になるよう、指導教員としても学生らが主体的関わりから学べるように心がけ、調査研究等を通じて問題解決を

図る学びに繋げています。しかしながら、その成果報告等の発表・ディスカッションの場においては、学内の内々の活動に留まりがちになってしまい、必ずしも様々な見識を有する方々から助言や意見を貰える訳ではありません。指導教員としては、学生らの研究経過や成果を多くの方々から意見を頂きディスカッションできる環境が必ずしも十分ではないことが課題になっておりました。その点本学会大会の教育発表セッションは、学部生も研究成果の発表ができる機会を設けられており、ゼミナールの能動的学習の一助になりました。

ゼミ生が行った研究は「スポーツ実施学生が有している認知的方略とスポーツの精神力」の関係性を明らかにするものでした。いわゆる「ポジティブ思考」といった認知的方略を有している学生ほど、精神力が高いという知見が先行研究からも得られておりますが、さらに悲観主義的であっても方略の取り方次第で、精神力が高くなるのではないかと考え、研究に取り組みました。研究結果は必ずしも仮説通りになった訳ではありませんが、教育発表セッションでは先生方から多くの質問やアドバイスを貰い充実していた様子で、卒業論文作成に向けても大きな刺激を得ておりました。

このような実践的な機会は他にはなかなかなく、本学学生の貴重な学びの場を与えていただきましたことに心より感謝申し上げます。今後も本学会で教育発表ができるように、ゼミナール等の教育活動を行って参りたいと考えております。ありがとうございました。

種ケ嶋 尚志（たねがしま・ひさし）／ 長崎県出身 2007年、聖徳大学臨床心理学研究科より博士（心理学）授与。大東文化大学スポーツ・健康科学部特任講師を経て、現在日本大学スポーツ科学部教授。専門はスポーツ心理学と臨床心理学。

教育発表を終えて

二見 優水
（日本大学）

はじめに、学部生という立場でありながら、日本応用心理学会第88回大会に参加させていただきましたこと、第88回大会事務局および関係者の皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今回、「体育系大学生における認知的方略と心理的競技能力の関連性について」というタイトルで発表を行いました。発表内容は、体育系大学生における認知的方略の傾向とその対処方略を検討することです。調査の結果、競技レベルが高い選手ほど心理的競技能力が優れている傾向がみられたことや、精神力の高い選手ほど、将来のパフォーマンスにおける「失敗」について熟考しない代わりに、「成功」や「計画」について考えを巡らせる傾向があることが明らかになりました。この結果から、心理的スキルを高めていくためには、失敗に対してネガティブな考え方に陥らずに、将来の「成功」や「計画」に対して熟考することが重要であることが示唆されました。

私は大学３年次より種ケ嶋尚志先生のもとで心理学を競技スポーツの観点から学んでおります。その中で、第88回大会参加のお誘いをいただき、昨年４月より本格的に執筆活動に取り組んでまいりました。就職活動と両立しながらの執筆活動であったため、研究の調査や分析が思うように進まない時期もありましたが、種ケ嶋先生のご指導のおかげで、何とかまとめあげることができました。最後までご指導いただきましたこと、心より感謝申し上げます。（本年４月より、新社会人として一般企業に勤めることになりましたが、心理学には引き続き携わっていきたいと存じます。）

今回、教育発表として参加させていただきましたが、研究成果を多くの先生方から評価いただけ

ましたことは、私にとって非常に貴重な経験となりました。その中で、研究の課題を発見することができましたので卒業論文にて活かしてまいりたいと存じます。

末筆ではございますが、日本応用心理学会第88回大会にて発表する機会をいただきました第88回大会事務局および関係者の皆様、ご指導いただいた種ケ嶋先生、アドバイスをくださりました全ての先生方へ重ねて厚く御礼申し上げます。

二見　優水（ふたみ・ゆうな）／ 新潟第一高等学校出身。日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科スポーツサポートコース卒業。大学在籍中は、スポーツ心理学研究室にて、スポーツ選手の認知・心理スキルの関係について取り組む。現在、（株）NSGホールディングス所属。

教育発表を終えて

谷口　淳一
（帝塚山大学）

京都工芸繊維大学で開催された日本応用心理学会第88回大会にて、私のゼミから２件の教育発表をする機会を頂きました。

発表をしたのはゼミの４年生です。彼らの学年はコロナ禍のため、研究法を学ぶ心理学実験もオンラインで受講し、グループワークや課外活動（ゼミ飲み会も）なども十分にできませんでした。そんななか、３年次のゼミの活動として、いくつかのグループに分かれて共同研究を実施しました。テーマ設定から研究計画の作成までグループで入念に話し合い、研究を実施しました。データ分析や結果のまとめ、論文作成まで実施し、本来であればゼミ内で発表会をして終わりなのですが、せっかく面白い研究を実施したのにそれでは寂しいなと思っていました。そんな時に、このたびの大会で教育発表の募集があり、また久々の対面での大会ということで、これは学生たちにも良い経験になると思い、応募させて頂きました。

教育発表を行うことは私がなかば強引に決めましたので、学生たちも最初はあまり乗り気ではなく、夏休み中に京都まで行くのは面倒くさいというような雰囲気もありました。ただ、学会大会がどのようなものかも分からず、発表自体の経験もないことから、そのような反応になるのもしょうがなかったかもしれません。

発表当日はゼミを代表して７名の学生たちが学会に赴き、それぞれ「Instagramの自撮り投稿への「いいね」の多少が自己愛に及ぼす影響」「浮気行動に対する許容度の大学生と社会人の相違」と題した２つのポスター発表を行いました。発表時間中は多くの先生方や大学院生の皆さんが発表を聴講して下さり、また有益なアドバイスを頂きました。端からその様子を見ていたのですが、なんとか自分たちの研究を理解してもらおうと説明し、頂いた質問に答えようとする姿はとてもいきいきとしていました。コロナ禍中は見られなかった学生たちの姿を見ることができ、少し目が潤みました。実際に学生たちからも「楽しかった」「勉強になった」「発表して良かった」という感想をもらいました。詳しくはこのあとの学生たちの原稿をご覧ください。

発表前には大学近くの有名ラーメン店を堪能したようで、そのことも報告してくれました。また、夜は京都駅近くのお店でコロナ対策をしながら簡単な打ち上げをしました。それらも含めて学生たちには良い思い出になったようでした。

応用心理学会大会で実施されている教育発表は学部教育を実施する上でとても有難い取り組みだと感じました。今回、このような貴重な機会を提供して頂き、また抄録の提出や発表方法などについて特段の配慮をしてくださった大会委員長の来田先生に心から御礼申し上げます。

谷口　淳一（たにぐち・じゅんいち）／ 帝塚山大学心理学部教授。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（人間科学）。大阪国際大学人間科学部講師を経て現職。専門は社会心理学、特に親密な関係や自己呈示について研究。

教育発表を終えて

大西　将宗
（帝塚山大学）

日本応用心理学会第88回大会において、谷口淳一ゼミナールから４年生７人で発表に参加させていただきました。今回私は「浮気行動に対する許容度の大学生と社会人の相違」というテーマで発表を行いました。

谷口淳一ゼミナールでは社会心理学を主として、様々な研究に取り組んでいます。今回のテーマとなった研究は、ゼミナール内でのグループワークの一環として取り組んだものです。研究のテーマ決めからグループで話し合いを重ねて進めていましたが、やはりグループでの研究には、メンバーと議論をしてより質の高い研究にしていけるという良い部分がある反面、メンバーの意見をしっかりと全員が納得のいくように取りまとめていくという難しい面もありました。しかし、それが個人で研究をする際にはないやりがいに感じられ、研究を終えるころには大きな達成感を得られたとともに、同じ研究に取り組んだメンバーとの関係値も非常に高いものとなっていました。

そのようにして取り組んできた研究成果を今回発表させていただけることになり、不安や緊張といった感情もありましたが、滅多にない貴重な機会でもあったため、参加させていただいたメンバー全員、楽しみにしておりました。自分たちの研究成果をたくさんの方々にみていただきアドバイスやコメントを頂戴したことで、非常に刺激を受けました。私たちにはなかった考え方や視点に触れ、研究及び心理学の奥深さや面白さについて再認識をすることができた、とても有意義な時間であったと思っております。

最後にはなりましたが、今回日本応用心理学会にて発表する機会をいただき、本当に感謝しております。また、ご指導いただいた谷口先生、そして私たちの研究にアドバイス、コメントをくださった方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

ポスター発表の様子

大西　将宗（おおにし・まさむね）／ 発表当時、帝塚山大学心理学部４年生。谷口淳一ゼミナールで社会心理学を専攻。学習意欲に他者の学業成績が影響を及ぼすかについて卒業研究を実施した。2023年３月に卒業し、４月より社会人。

教育発表を終えて

坂本　茅杜
（帝塚山大学）

初めに、このような機会をいただき、誠にありがとうございました。今回の発表を終えて、私自身とても良い経験になったと考えております。

まず、新型コロナウイルスによって学生同士の繋がりが少なくなっていた当時、誰かとグループで研究を実施して論文としてまとめる機会は、他人と接することができる、とても貴重な時間でした。

おかげさまで、ゼミ内での仲が深まったと思います。

「この研究方法、もっとこうすればいいんじゃない？」

「んじゃ、仮説はこうなるね。」

など話し合い、メンバーと一緒に作業をした思い出は、この先消えることは無いでしょう。

そして本番当日、緊張と不安でいっぱいでしたが、他大学の方々への説明、頂いた質問に対する回答を私が担当しました。暑さが原因なのか、緊張していたことが原因なのか定かではありませんが、汗をかきながら発表していたのを今でも覚えています。このときグループの子たちが、笑いながら私に下敷きで風を仰いでくれました。くだらないことかと思いますが、私はみんなと仲良くなったのでは？ と思えた瞬間でした。

また、東西南北問わず、有名な大学や、遠方から来て頂いた方もいたため、初対面でも頑張って話す良い練習にもなりました。

最後になりますが、今回のような貴重な機会を提供して頂きました関係者の方々、そして私たちのゼミの谷口先生には感謝でいっぱいです。

誠にありがとうございました。

本人発表の様子

坂本　茅杜（さかもと・かやと）／ 発表当時、帝塚山大学心理学部４年生。谷口淳一ゼミナールで社会心理学を専攻。学歴が印象形成に及ぼす影響について卒業研究を実施した。2023年３月に卒業し、４月より社会人。

第89回大会に向けて

髙石　光一
（亜細亜大学）

日本応用心理学会第89回大会は、東京都武蔵野市の亜細亜大学にて開催させていただくことになりました。

私は、実行委員長を務める髙石光一と申します。全国から会員の皆様をはじめ、多くの方々をお迎えすべく、実行委員会では準備を進めておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

会期は、8月26日（土）・27日（日）です。今夏は全面対面による有益な研究と情報の交流を目指したく思います。「ポストコロナとデータ社会の応用心理学」を大会テーマに掲げ、シンポジウム、特別講演、ワークショップを実施いたします。ポスター発表および口頭発表の場を予定し、研修会や教育発表も実施いたします。院生会員・学生会員を対象とした若手研究者の発表費支援も行います。

前大会（第88回京都工芸繊維大学）は、京都の伝統とオンライン技術等を活かした素晴らしい内容でした。武蔵野の地にはこれほどの特徴はなく、また髙石がアナログ人間であることから、slack等のSNSもご用意できませんが、実行委員会では、亜細亜大学らしいイベントを考案中です。その一環として、今春、本学経営学部にはデータサイエンス学科が新設され、AI等の先生方が参画しましたので、最先端の認知科学をテーマとした特別講演も予定しています。詳しい内容は学会ホームページをご参照くださいませ。

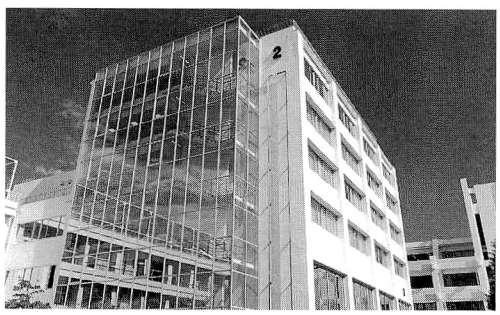
武蔵野市の地場産業はアニメであり、吉祥寺には沢山のアニメスタジオが集積し、三鷹市にはジブリ美術館（毎月10日から翌月入場分を予約発売します）などの人気スポットもございます。

亜細亜大学の最寄り駅であるJR中央線武蔵境駅には、吉祥寺駅から8分、新宿駅から20分、東京駅からも32分で到着します。

長い歴史を誇る日本応用心理学会大会の亜細亜大学での開催は初めとなりますが、既に大会事務局には多くの皆様からの企画、ご発表のお申込みをいただいております。8月の暑い時期でありますが、会員諸先生方のご参加を心よりお待ち申し上げます。

なお、会期中は周辺地区で大きなイベントが開催され、宿泊施設の混雑が予想されます。ホテル等お早目のご手配をお勧めいたします。

亜細亜大学7号館B館



亜細亜大学2号館

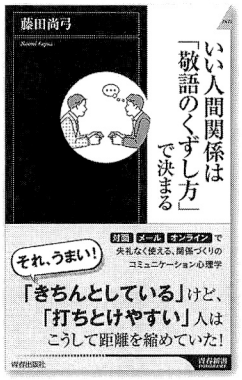
髙石　光一（たかいし・こういち）／ 1956年 横浜生まれ。1984年～2002年 中小企業基盤整備機構にて中小企業への出融資、経営者・管理者研修等に従事。2002年～2014年 東京富士大学、大東文化大学を経て、2015年～現在 亜細亜大学経営学部教授。中小企業論、ベンチャービジネス論、行動科学等を担当。

2021年度齊藤勇記念出版賞を受賞しました。

いい人間関係は「敬語のくずし方」で決まる

藤田　尚弓 著

2021年９月15日発行
(株)青春出版社
本体900円（税別）



本書は出版社さんが持ち込んでくださった企画を、先行研究をベースに平易な文章で執筆した新書です。担当編集の方が敬語の崩し方について書けそうな著者を探していたとき、たまたま私がある媒体に寄稿したスピーチレベルシフトに関するコラムを見つけてくださり企画が実現しました。

日本人は基本的に初対面の人と敬語で話すのに、親しい人とはいわゆるタメ口で話します。親しくなる過程では、敬語からタメ口に移行するプロセスがあるわけですが、どんなタイミングでどのようにくずすのかは経験だけに頼っているのが現状です。ですので「早いタイミングで敬語をくずしてしまって慣れ慣れしいと思われた」「敬語をゆるめ過ぎてしまい生意気と言われた」など、失敗することもあります。

私自身もそうだったのですが、失敗を恐れるあまり、少し緩めの敬語を使った会話がふさわしいと思われる場面なのに敬語のまま通してしまった経験がある人もいるのではないでしょうか。

本書では失礼なく敬語をくずすことをテーマにし、どのタイミングで、どのように敬語をゆるめていくかを軸に、カジュアルな話し方でも敬意を示す非言語コミュニケーションなど、実際の場面で必要になることを具体例を入れながら解説しました。

執筆にあたっては先行研究をなるべく平易に、正しく伝えるという点に気をつけました。易しく、興味を持ってもらえるように伝えようとすると、正しく伝わりにくいというジレンマに陥り、執筆期間は２年半にも及びました。「アウトリーチ」と「正しく伝える」ということは、今後あらゆる発信をしていく中で両輪にしたい大事な課題として私の中に残っています。

まだまだ力不足ではありますが、素晴らしい賞に恥じないよう、今後も執筆活動を続けていけたらと思います。励みになる素晴らしい賞をありがとうございました。

藤田　尚弓（ふじた・なおみ）／ 早稲田大学、同大学院人間科学研究科にて感性認知領域を専攻。全国初の防犯専従職として地方警察署で広報を担当後、株式会社アップウェブ代表取締役に就任。法政大学大学院客員教授を経て、現在、早稲田大学エクステンションセンター講師。

若手会員研究奨励賞

若手会員研究奨励賞

横井川 美佳
（京都大学大学院）

この度は、「発達に支援が必要な子どもたちとのポジティブな経験の重要性」をテーマとした研究活動にたいして2021年度若手会員研究奨励賞を授与していただき、誠に光栄に存じます。

日ごろ児童発達支援事業所で子どもたちと関わっていると、「あの子、きっと○○したかったんだね」「あの子の表情よかったよね」というような、子どもたちの気持ちがあふれる貴重な瞬間に出会うことがあります。そんな貴重な瞬間の意味をもっと深めたいと思ったことがこの研究を始めたきっかけです。

子どもたちと関わる大人のポジティブな経験は、支援へのやりがいや手応えを実感することにつながります。子どもたちにとっても、自分のことを「わかってもらえた」「大切にされた」というポジティブな経験となり、子どもたち自身の自己理解を豊かにしていきます。

発達支援においては、「できないこと」を「できるように」といった子どもたちの行動変容や、保護者や支援者の困り感など「ネガティブ」な側面へのアプローチやその改善についての研究が多くなされています。それに対して本研究では、発達に支援が必要な子どもたちと関わる中で、保護者や支援者が感じている「ポジティブな経験」の重要性に着目しました。「今ここ」でポジティブに感じている経験から、発達支援の新たな方向性が見出せるのではないかと考えました。

本研究では、保護者と支援者を対象としてアンケート調査を行いました。そのうち支援者を対象とした調査の結果を、2022年9月17日～18日に京都工芸繊維大学で開催された日本応用心理学会第88回大会で発表しました。保育施設・療育施設の職員139名の方々の協力を得て、「発達に支援が必要な子どもたちへの支援において、ポジティブな経験のエピソードを3つ教えてください」という問いに対して自由記述で回答してもらいました。KH Coderを用いたテキストマイニングでは、経験年数を重ねるにつれて、子ども理解が深まっていくことが明らかとなりました。また、ポジティブな経験として、所属する施設の役割や特徴を反映したエピソードが書かれることも特徴的でした。SCATによる質的な分析では、支援者にとって貴重なポジティブ経験の内容として、「子どもの成長・発達の実現」と「保育者・支援者の保育・療育の力の熟達化」、さらに「保育者・支援者と子どもとの温かな関係性の構築」の大切さが示唆されました。子どもたちや保育者・支援者が何かができるようになるといった行動面での変化以上に、子どもたち自身が「思い」や「願い」を率直に発信し、保育者・支援者がそのメッセージを受けとめて子ども理解を深めること、そしてそれが可能となるような温かな関係性を培っていくことが重要だと考えられます。この研究の成果を生かして、これからも子どもたちを温かく支えていきたいと思っています。

今回の保育者・支援者を対象とした調査では、多くの方々から「自分の普段の支援を振り返ることができてよかった」といった感想がありました。日常の暮らしがあっという間に過ぎていく中で、自分の言葉でポジティブな経験を自由に振り返ること自体に大きな意味があるかもしれません。

2021年度から若手会員研究奨励賞の応募要件が緩和され、年齢制限が撤廃されました。私自身、この緩和のおかげで応募することができ、たいへんうれしく思います。長い人生の中で「学びたい！研究したい！」と思ったそのタイミングで研究への援助が得られ、貴重なチャンスを与えていただいて今回の調査研究を行うことができました。本学会の若手研究支援への取り組みに感謝しております。

本研究はまだ道半ばです。現在、支援者の経験内容の考察を深めるとともに、保護者が感じたポジティブな経験の分析を進めています。本研究で得られた知見をよりよい保育・療育につないでい

くことができるよう、これからも実践の場で子どもたちを大切にして研究に励みたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

横井川 美佳（よこいがわ・みか）／ 滋賀県甲賀市出身。京都大学医学部保健学科を卒業後、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程に進学。修了後は児童療育施設で勤務。2020年に同大学院博士後期課程に編入学。現在、非常勤職員として療育施設で勤務しながら、乳幼児期の発達の基礎研究、保育・療育の実践的研究を進めている。

学会賞（論文賞）

井上　裕珠

（日本大学）

このたびは、素晴らしい賞を頂戴し、大変光栄に存じます。受賞論文である「カロリー情報の表示位置が消費者の食品選択に及ぼす影響」は、日本大学商学部で開催された日本応用心理学会第86回大会の教育発表において、ゼミナールの学生と一緒に発表した思い出深い研究です。教育発表において学生が先生方に多くのアドバイスを頂戴し、それらのご意見を参考にしながら私自身が研究を進め、学会発表を経て応用心理学研究への掲載に至りました。まさに応用心理学会に育てていただいた研究がこのような名誉ある賞をいただくことができ、とても嬉しく感じております。教育発表や学会発表において多くのご意見をくださった先生方、論文の査読をしてくださった先生方、論文賞において評価していただいた先生方に心より感謝申し上げます。

本研究は、カロリー情報の表示場所が消費者の低カロリーメニュー選択に与える影響を検討した研究です。四つの研究を通して、横書きメニューの場合には、メニュー名の左側にカロリー表示をしたほうが、縦書きメニューの場合には、メニュー名の上側にカロリー表示をしたほうが、カロリー表示をしないときと比較して、低カロリー選択がなされやすいことが示されました。はじめはゼミナールの学生と読んだDallas, Liu & Ubel (2019)の面白さに惹かれ、日本において追試できるのだろうかという単純な興味から研究を始めましたが、次第に食研究の面白さと健康に関する研究の意義を感じ、研究に没頭していきました。特に研究途中にコロナ禍に突入したこともあり、健康を守ることの重要性を身をもって体験したことが研究のモチベーションを高めることにつながったように感じます。

本研究を実施するにあたり一番力を入れた（そして苦労した）のはメニュー表の作成でした。日本において追試をするうえで先行研究の実験刺激をそのまま使用することは難しく、どのようなメニュー表であればリアリティが出るのか、カロリー情報はどのように設定するのかなど、実験材料作成には随分頭を悩ませましたが、ゼミナールの学生のフレッシュな意見が大いに参考になり、完成させることができました（メニュー表は学生の手作りです）。コロナウイルスの感染拡大も落ち着いてきましたので、今後はたとえば大学の学食などを利用するなどして、本研究で得られた知見が現実場面において再現できるのかどうかを検討したいと考えています。これからも研究活動により一層励んでまいりますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

引用：Dallas, S. K., Liu, P. J., & Ubel, P. A. (2019). Don't count calorie labeling out: Calorie counts on the left side of menu items lead to lower calorie food choices. Journal of Consumer Psychology, 29, 60-69.

井上　裕珠（いのうえ・ゆみ）／ 2016年 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了　博士（社会学）。帝京大学経済学部助教を経て、2018年４月より日本大学商学部専任講師。専門は、社会心理学と消費者心理学。

学会賞（奨励賞）

学会賞（奨励賞）

伴　碧

（大阪大学大学院）

この度は、学会賞（奨励賞）という名誉ある賞を頂戴し、大変光栄に存じます。まずは、この場をお借りして、丁寧かつ的確なコメントをくださった査読者、編集委員会、選考委員の各先生方、そして、本研究の実施にあたり多大な支援をいただきました、2018年度同志社大学心理学部卒業生のみなさまに、心より御礼申し上げます。

本論文は、大人が「ふり遊び（pretend play）」をしていることを、幼児がどのような手掛かりから理解するようになるかを検討したものです。「ふり遊び」とは、主に、母親と子どもなど1対1で行われる「ごっこ遊び」であり、子どもが成長するにつれ、集団でのふり遊び、いわゆる「おままごと遊び」に発展していきます。そして、ふり遊びの場合には「これは嘘っこだよ」というシグナルを、大人が提示することが重要になります。このシグナルがあることで、子どもは、現実の大人の行為が「ふり」であることを理解出来るようになります。仮に、子どもが「ふり」であることを理解しないまま遊びが展開されると、我々大人は、積み木を美味しそうに食べる、何とも変な人になってしまいます。

本論文では、上述したような「シグナル」を複数用意し、どのシグナルが、幼い子どもにとって重要な手掛かりとなるかを検討しました。幸いなことに、新型コロナウイルスの流行前だったので、実験は幼稚園において実施することが出来ました。その際、刺激の統制を取るために、大人が「シグナル」を表出している様子を事前に撮影し、その動画をディスプレイ上に提示して実験を行いました。

新型コロナウイルスの流行以降、保育園や幼稚園が閉鎖され、対面で子どもと遊ぶことが難しくなり、オンライン保育のニーズが高まった時期がありました。私自身、姪っ子とオンライン上で会話し、遊ぼうとしたのですが、こちらの意図が伝わらないことがありました。そこで、姪っ子相手に、最も効果的だったシグナル（オノマトペ）を用いて、オンライン上でふり遊びを試みました。結果、姪っ子は、ふり遊びにのってきてくれました。

私たち心理学者は「実験で得られた結果は、現場で本当に応用可能なものか」を問われる場面に直面することがあると思います。この論文を通して、私自身、知見を応用することの大切さを実感できたとともに、「応用」心理学会で、このような賞を受賞出来たことに感謝申し上げます。この度の受賞を励みに、今後も応用可能な研究を進めて参ります。

伴　碧（ばん・みどり）／ 同志社大学大学院心理学研究科博士課程修了。博士（心理学）。現在、大阪大学大学院基礎工学研究科特任講師。発達心理学、Human-Agent Interaction研究に従事。

学会賞受賞論文（井上裕珠先生）へのコメント

吉澤　寛之

（岐阜大学）

新型コロナウイルスの影響により、自宅で過ごす時間が長くなる昨今、栄養の偏りやカロリー摂取異常といった非健康的な食生活が問題視されています。かくいう私も、その影響でダラダラと好きなお酒を飲みすぎて、ここ数年は人間ドックの結果が怖くなっております。受賞論文では、このような食生活の問題を解決するために、近年、着目されているナッジの視点から、消費者のカロリーコントロールを無自覚に方向づけるカロリー表示に着目して研究が計画されています。

この論文では、さまざまに工夫された計画によ

り研究がなされています。まず、選択メニューの合計カロリーを従属変数とすることで、自らがカロリー表示を自覚しているか気づくことなく、無意識的にカロリー摂取を低減する選択を行っている現象も網羅しています。また、心理学研究における再現性の問題にも着目し、先行研究の直接的追試や概念的追試を複数の研究により行っています。概念的追試としては、横書きと縦書きの表記のある日本語の特性をうまく生かすことで、同じ言語で統制したうえで、表示位置の効果のみを操作した検証を可能にしています。さらに、一般サンプルを対象とすることで、大学生のみが対象とされる心理学研究の方法的な問題にも対応しています。

分析においても工夫がなされており、カロリー表示へ無頓着であるがゆえに表示の恩恵を受けていない人を考慮して、カロリーに着目する個人差も考慮した丁寧な分析がなされています。連続した研究を実施するなかで、Satisficeの問題に気づき、次の研究でそれを改善するために該当者を除外した分析もなされています。

井上先生は国内外の学会誌に多くの論文を掲載され、精力的な研究をなさっています。最新の単著の英文雑誌では、商品を触ることをイメージすることで、物理的なコントロール感や心理学的な所有感が促され、結果として購買意図を高めること（Inoue, 2023）を報告されています。本受賞論文を発展するかたちで、興味深い知見を次々と見出しておられます。

今後も井上先生の独創性に満ちた研究活動をフォローさせていただきたいと思います。このたびは、本当におめでとうございました。

吉澤　寛之（よしざわ・ひろゆき）／ 2006年、名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士（後期）課程修了、博士（心理学）。現在、岐阜大学大学院教育学研究科教授。研究テーマは、反社会的行動に関する心理メカニズムや関連する社会性、対人環境の影響の解明。

学会賞受賞論文（伴　碧先生）へのコメント

古谷　嘉一郎
（関西大学）

皆さんも小さなころ、ふり遊びを楽しんだことがあると思います。例えば、積み木を電話の代わりとして用いたり、自分自身がアニメのキャラクターになったかのような行為をするものです。私の娘もふり遊びを楽しんでいます。

このふり遊びの前提として、子どもが、「他者が“ふり”をしていること」を理解していないといけません。それでは、どのようにして子どもは他者が“ふり”をしていることを理解するのでしょうか。

伴碧先生と内山伊知郎先生の論文では、この謎を解き明かすため、“ふりシグナル”という観点に着目されました。“ふりシグナル”とは、大人は、遊びの動作を長く、誇張して行うことで、今の状況が現実ではなく“ふり”であることを子どもに伝えるものです。例えば、大人が、頻繁に笑顔を表出したり、子どもを長い時間見つめたり、発話を多くしたり、食べ物を食べたり飲んだりする動作を長く示したりすることを指します。

論文では、笑顔や発話といった複数の要素による“ふりシグナル”を提示した先行研究を紹介されていました。どうやら“ふり”と現実の区別ができるようになるのは2歳半以降であるそうです。しかし、複数の要素が含まれた“ふりシグナル”でなく、単独の要素の“ふりシグナル”ならばどうなのでしょうか。複数の要素と同じように“ふり”と現実を区別できるようになるのでしょうか。実験による検討の結果、“発話”という単独のふりシグナルが子どものふりの理解を促すうえで有効であることが示唆されました。また、先行研究と同様に2歳半ごろまでに他者の行為が“ふり”であると理解できることも示されました。

本受賞論文は、日々の子育てで気づかなかったことを父親である私に教えてくださいました。私の下の子は5歳ですので、もうすでに“ふり遊び”は理解しています。しかし、2歳から3歳頃はどうだったのだろうと、スマホで撮影した動画を再び見る機会を私に与えてくださいました。

このように、丁寧に実験デザインを組みつつそして、現実社会に還元できる内容の本論文は、まさに応用心理学研究の学会賞（奨励賞）にふさわしいものと考えます。このたびはおめでとうございました。

古谷 嘉一郎（ふるたに・かいちろう）／ 2007年、広島大学大学院生物圏科学研究科修了、博士（学術）。現在、関西大学教授。最近の研究テーマは、子育て中の養育者のバーンアウトを引き起こす要因の解明。

第87回大会優秀発表賞
「口頭発表」部門

竹内 倫和
（学習院大学）

この度は、第87回大会の口頭発表部門におきまして、当方どもの研究発表（「コロナ禍における若年従業員の自律的職務行動に向けた支援型リーダーシップの役割」共同研究者：石田将・枝卓也・杉山彰英・塚本正樹・野田幸紀・長谷川達哉）に対して、優秀大会発表賞を頂き、本当にどうもありがとうございます。コロナ禍の中で第87回大会をご開催頂きました大会実行委員会の皆様、そしてオンライン開催にもかかわらず多くのご質問とご関心を頂きました研究大会参加者の皆様、改めて深くお礼申し上げます。

2020年に新型コロナウィルスがわが国で蔓延し、企業の中で急速にテレワークが導入される一方で、職場での上司－部下間及び同僚間での対面接触機会が大きく削減し、従業員一人ひとりに自律的な職務遂行がより強く求められています。このような背景のもと、本研究は上司の支援型リーダーシップが部下の自律的職務行動にいかなる影響を及ぼすのかについて独自の媒介モデルを設定し、それを実証的に検討したものです。具体的には、(1)上司による支援型リーダーシップが若年従業員の自律的職務行動に対して効果的な影響を及ぼすこと、(2)影響メカニズムとして、職場の心理的安全性と内発的動機づけを媒介して、支援型リーダーシップが自律的職務行動を促進すること、を明らかにしました。

以上の点は、コロナ禍ばかりでなくポストコロナの職場においてもテレワーク環境が一定水準継続導入されていくと考えられる中で、上司による部下に寄り添う支援型リーダーシップが有効であるという実務的意義が示唆されます。また、上司による支援型リーダーシップがなぜ自律的職務行動を喚起するのかという新たなメカニズム（心理的安全性と内発的動機づけ）を解明したという意味において、既存研究への一定の貢献があるのではないかと考えております。

今回頂戴した賞を励みに、今後も組織心理学領域の研究活動に精進し、日本応用心理学会での研究発表や論文執筆を行っていきたいと思います。研究発表に対する質問やコメントを頂戴することは、新たな気付きやアイデアを得るという点でとても大事なことだと思っております。これからも学会においてご指導を頂きますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

竹内 倫和（たけうち・ともかず）／ 学習院大学経済学部教授。博士（経営学）。専門領域は、産業・組織心理学や組織行動論、キャリア発達論。これまでにカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）アンダーソンビジネススクール客員研究員、慶應義塾大学大学院経営管理研究科訪問教授等を歴任。*Journal of Vocational Behavior*誌や*Human Resource Development Quarterly*誌などに論文掲載。金融庁「公認会計士試験」試験委員、心理学検定運営委員。

第87回大会優秀発表賞
「ポスター発表」第１部門

和田　裕一
（東北大学大学院）

この度は、応用心理学会第87回大会にて優秀大会発表賞をいただき、誠にありがとうございます。コロナ禍による対面での学会開催中止が相次いでいた折り、多くの困難を乗り越えて研究発表の場をご準備いただいた学会関係者の皆様に深くお礼申し上げます。

今回発表いたしました「マンガの読み時間から読み手の性格を推定する」という研究は、そのタイトル通り、マンガの読み時間を特徴量とした機械学習モデルを構築し、読み手のBig５パーソナリティ得点のレベル（高・中・低群）の推定を試みたものです。パーソナリティ各次元に関してチャンスレベルをある程度上回るパフォーマンスが認められたものの、推定精度という点ではまだ改善の余地が残される結果となりました。

マンガを素材とした研究としては学習マンガの教育効果に関するものや４コママンガを使った研究はしばしば見受けられますが、本研究では実際のストーリーマンガを用いています。多くの人にとって身近な読書素材であるマンガですが、その心理学的な認知処理特性についてはまだよくわかっていない部分が多く、日常生活に垣間見える心理学的諸問題の探究を目指す応用心理学の研究課題として魅力的なテーマであると考えています。

また本研究では、予測精度の評価手法に機械学習のアプローチを採り入れています。有意差検定を用いて群間差や因子の影響力を主張することを重視する従来の統計学的アプローチに対して、機械学習の方法論ではモデルが未知のデータをどの程度分類もしくは予測できるかという点を重視します。本学会の機関誌である『応用心理学研究』や大会における研究発表では機械学習を用いた研究はまだそれほど多くはないようですが、データ分析の一手法として一定の市民権を得て今後その存在感を増していくのか、個人的にその動向を注視しています。

和田　裕一（わだ・ゆういち）／ 三重県伊賀市生まれ。東北大学大学院情報科学研究科修了。博士（情報科学）。2007年より東北大学大学院情報科学研究科准教授。専門は認知心理学。最近は眼球運動指標を用いたメディア認知の研究に従事している。

第87回大会優秀発表賞
「ポスター発表」第２部門

軽部　幸浩
（日本大学）

★教師のイメージってどんなものなのかな？

今回、日本応用心理学会第87回大会（東北文教大学）にてポスター発表第２部門（教育・発達・人格）で優秀大会発表賞を受賞しましたこと、大変うれしく思っています。まことにありがとうございました。また、第88回大会(京都工芸繊維大学)では、大会委員長の来田宣幸先生のご尽力もあり、対面とオンラインを併用するハイブリッドの大会開催となり、久しぶりに多くの先生方と直接お会いすることができました。また、交流会という機会を設けてくださり、そこで表彰まで行ってもらえました。重ねて御礼申し上げます。

さて、今回発表した「一般大学学生の教師に関するイメージの調査について」は、教職を目指す都内の体育系大学の新入生が、どのように教師のイメージをとらえているのかということについて、教育心理学的な視点からの研究を行いました。調査内容は、過去の研究報告から、望まれる教師像を「職業としての誇りと専門性をもち、児童生徒や保護者から厚い信頼を寄せられ、また他者とのコミュニケーションをとることができる教師」と定義し、調査項目をそれに準じて行いました。

今回の調査対象者は、大学へ入学後間もない１年生であったため、教職課程の科目を履修した高学年生と比較検討することができませんでした。可能であれば、今後は教職課程履修希望者（１

～4年生）が教師像をどのように描いていくのか、そして教育実習をどのように捉えていくのかを縦断的に検討できればと考えています。今後さらに研究を進めて、教職を目指している学生の夢が形になるための一助になればと思っています。

軽部　幸浩（かるべ・ゆきひろ）／ 東京都港区生まれ。祖父は皇室献上和菓子職人。駒澤大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位取得退学。専門は、教育心理学、精神生理学。応用心理士。

第87回大会優秀発表賞
「ポスター発表」第4部門

島田　恭子
（東洋大学現代社会総合研究所）

子育て女性の健康増進および心理的ウェルビーイング向上を目的としたランダム比較試験
― 対人関係向上動画プログラム=HIPCom（ヒプコム）の開発および効果検証 ―

島田恭子・桐生正幸・染矢瑞枝

この度は、第87回大会優秀発表賞を授与いただきまして、誠にありがとうございます。このような映えある賞をいただき、発表者一同、心より感謝致しております。

本研究は対人関係に焦点をあてたメンタルトレーニングプログラムの、ウェルビーイング向上効果を、子育て女性を対象に検証したものです。本研究のポイントは特に、1. 精神健康を左右する要素である対人関係に焦点をあてスキル化を支援することでウェルビーイング向上を検証したかったこと　2. 育児や仕事で手が空きづらく、時間が取れない子育て女性でも気軽に取り組めるよう、動画、音声、テキストを併用したこと　3. コロナ禍でもアクセスしやすいよう、（対面、オンラインではなく）オンデマンド型としたこと、などでした。

ランダム化比較試験の結果、群間で有意な介入効果が認められました。心理的ウェルビーイングには下位概念として、1. 自律性、2. 自己受容、3. あたたかく信頼できる他者関係、4. 人格的成長、5. 人生の目的、6. 周りの環境をコントロールできる感覚、の6つがあります。本研究のコンテンツには、自分の気持ちを受け入れる（自己受容）、コントロールできる部分を見極める（自律性）、対人関係の心構えやテクニック（他者関係）、などが含まれており、段階を踏みながら動画やテキストを用いて学習していただいたことで、ウェルビーイング値が上昇したのではないかと考察している次第です。

これまで精神疾患を持つ対象者向けのメンタルトレーニングに関する知見は積み上がっていますが、メンタル未病層（精神疾患と診断されていないがストレスや悩みが多く予防介入が必要と思われる層）への、非対面による介入効果のエビデンスは、ほとんど得られていないのが現状です。

今回の受賞に力をいただき、今後もメンタル未病層を対象に時間的・空間的制約が少なく、コロナ禍でも拡散が容易な、科学的根拠に基づく健康増進を目的としたメンタルトレーニングプログラムの普及に力を入れていきたいと考えています。

最後になりましたが、お忙しい中本研究にご協力いただき貴重なデータやご意見をお寄せいただいた対象者の皆様に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

島田　恭子（しまだ・きょうこ）／ 企業での人材育成の経験から、心の健康の重要性を感じ、東京大学大学院医学系研究科にて予防医学・メンタルヘルスを研究。保健学博士。一般社団法人ココロバランス研究所代表理事・東洋大学現代社会総合研究所客員研究員。

第87回大会優秀発表賞
「ポスター発表」第５部門

桐生　正幸
（東洋大学）

この度は、第87回大会にて「接客対応者へのカスタマーハラスメントにおけるCOVID-19パンデミックの心理的影響」と題しましたポスター発表に対し、名誉ある素晴らしい賞を頂戴し誠にありがとうございました。

本研究は、労働組合UAゼンセンによる2017年（COVID-19パンデミック前）及び2020年（COVID-19パンデミック時）に実施した所属組合員に対するカスハラ実態調査のデータを再分析したものです。COVID-19パンデミックが、カスハラの形態や接客対応者のストレスに、どのような心身への変化をもたらしたのかを探索的に検討いたしました。その結果、接客対応者へのカスハラにおけるCOVID-19パンデミックの影響として、これまでとは異なるカスハラの言動が出現し、ストレスによる心身への悪影響も多くもたらされていたことが明らかになったところです。

近年、消費者からのカスタマーハラスメントが大きな社会問題となっています。ただ、その実態については、まだまだ不明な部分が多く心理学における研究も多くはありません。加えて、悪質な迷惑行為を受けた接客対応者などのストレスについての対応についても十分に検討されておりません。

そのため、広く有識者を募り任意の組織「カスタマーハラスメント対応協会」を立ち上げ、具体的な問題へのアプローチと学際的研究を始めてみました。また昨年度は、学会主催公開シンポジウム「カスタマーハラスメント―心理学的アプローチの可能性を探る―」を開催し、企業の消費者担当部門などの方々と共にカスハラ問題を広く社会や学会に周知させていただきました（詳細は、応用心理学研究 2022、48(1)、38-65.をご覧ください）。

研究も具体的な活動も始まったばかりですが、引き続き応用心理学の社会実装を目ざして（ほそぼそと）進んでいきたいと思っています。

ちなみに、これまで大学院生や企業の方との研究連名にて、何度か本優秀賞を（おこぼれ的に）頂戴しておりましたが、今回は筆頭での初受賞となりました。諸先輩を見習って、のんびりせず心機一転、精力的に研究へ邁進しなさい、といった心理学の神様からお達しが届いたのだと感じております。

そのようなわけで今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

桐生　正幸（きりう・まさゆき）／ 1960年 山形県生まれ。文教大学中退、博士（学術）。山形県科学捜査研究所主任研究官、関西国際大学教授を経て、現在、東洋大学社会学部長。神戸学院大学、聖心女子大学など非常勤講師、日本犯罪心理学会常任理事、日本カスタマーハラスメント対応協会理事。クローズアップ現代+、スイス国営放送など出演。

第87回大会優秀発表賞
「ポスター発表」第６部門

大森　哲至
（帝京大学）

この度は第87回大会での発表につきまして、優秀大会発表賞（産業、交通、災害：第６部門）にご選出いただき、誠にありがとうございます。大会運営に携わられた皆様、研究発表にご参加くださった皆様、調査にご協力いただいた東京都三宅島三宅村の皆様に心より御礼と感謝申し上げます。

本大会で発表させていただいた題目は「継続する自然災害による被災者への長期的影響－2000年三宅島噴火から20年後の被災者の精神健康調査から－」でした。2000年に起こった三宅島噴火では噴火後も大量の火山ガスの放出が10年以上にわたって続きました。その被害により被災者は約５年間の島外避難を強いられただけでなく、復帰後も生活再建をしていくなかでさまざまな困難に直面しました。私は大学院生の頃から三宅島をフィールドとし、三宅村の皆様のご協力を賜りな

がら被災者の長期的影響のメカニズムについて解明するための研究活動を続けています。

これまでの研究活動では日本版精神健康調査票28項目版を使用し、災害の発生から7、9、13年後に調査を行っています。それらの結果ではハイリスク者の割合は50～60%（一般成人の割合は14～30%）の範囲になっていて、災害の被害が被災者の精神健康に長期にわたり影響していることが見出されています。

今回発表したのは20年後の調査結果ですがハイリスク者の割合は51%となっていました。またハイリスク者の発生に寄与するリスク要因を分析した結果、これまでとは違った傾向が認められました。これまでの結果では健康不安を感じる、仕事が順調でない、経済的な問題を抱えているなどの要因が顕著でした。他方20年後の結果では生活満足度が低いと感じる、生活のなかで打ち込めるものや生きがいをもてないでいるなどの要因が顕著でした。このような違いは災害からの時間的経過に応じて被災者の精神健康に影響を及ぼす問題も異なることが推察され、今後の被災者支援の課題として被災者の抱える問題に寄り添ったサポートを展開していくことが重要です。今回の受賞を励みに今後もより一層精進していきたいと思います。

大森　哲至（おおもり・てつし）／ 横浜国立大学大学院国際社会科学研究科企業システム専攻後期博士課程修了。博士（経営学）。現職は帝京大学外国語学部国際日本学科准教授。研究分野は社会心理学、災害心理学。大学院生の頃から被災地でのフィールドワークを中心に研究活動している。

第87回大会優秀発表賞
「ポスター発表」第７部門

古澤　伸晃
（日本体育大学）

この度は、日本応用心理学会第87回大会にて、スポーツ・生理の第７部門で優秀大会発表賞をいただき、誠にありがとうございました。この場をお借りしまして、本研究の調査にご協力いただいた方々や、ご指導いただきました新里知佳野先生、八木沢誠先生、軽部幸浩先生、藤田主一先生に御礼申し上げます。

本発表は、コロナ禍での開催ということで非対面形式での実施となりましたが、今後の研究・発展につながる多くのコメントをいただいたことに大変感謝しております。また、応用心理学の分野で「剣道」という研究はとても少なく、興味を持っていただけるか心配でしたが、このような賞をいただいたことに感謝するとともに責任を感じております。

さて、発表させていただきました「日体大版剣道イメージ尺度（NIKS）の作成（1）－研究目的と予備的調査について－」ですが、この研究は、剣道を「習う者」「指導する者」の心理的構造を測定する目的のためにまとめたものです。武道必修化に伴い、教育現場では武道を指導することが必須となり、それを指導する指導者の心理的構造を明らかにできれば指導の参考になるのではないかと考えています。武道（剣道）は、難しい、厳しい、指導するのが大変等のネガティブな面があることは周知のとおりです。これらのことを分析し、更に発展させていきたいと考えております。

最後に、この賞を励みにして、今後も「剣道」の指導・発展のために研究を進め精進してまいります。この度はありがとうございました。

古澤　伸晃（ふるさわ・のぶあき）／ 1981年 熊本県生まれ。2004年 日本体育大学卒業後、皇宮警察本部に奉職。2017年 日本体育大学大学院博士前期課程修了。現在は、日本体育大学学友会剣道部部長兼男子監督。剣道教士七段。

公開シンポジウム「いわゆる「あおり運転」について考える!」に参加して

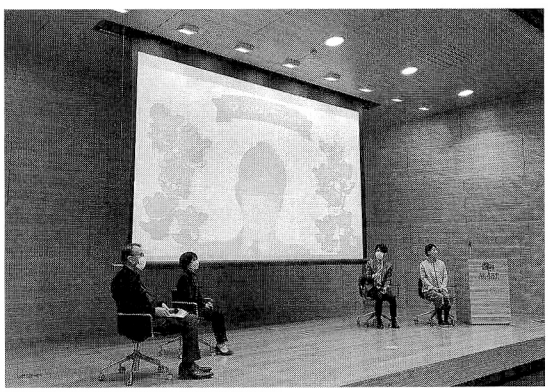
森泉　慎吾
（帝塚山大学）

2022年11月19日（土）に名古屋大学東山キャンパスにて、本学会公開シンポジウム「いわゆる「あおり運転」について考える！」が開催され、現地で参加させて頂きました。報道等でご承知の通り、「あおり運転」は近年大きな社会問題となっており、2020年６月には改正道路交通法が施行され、「妨害運転罪」として定義化されました。チューリッヒ保険会社が毎年実施しているあおり運転の実態調査によれば、１週間に１回以上運転している全国のドライバー2,230人のうち51.3%があおり運転を経験したことがあると回答しており、日頃ハンドルを握るドライバーの皆さまにとって身近な問題であるといえます。

交通心理学のフィールドでは、あおり運転は「ロードレイジ（road rage）」や「攻撃的運転（aggressive driving）」という現象で古くから実証的な研究がなされてきました。今回の話題提供者であった中井宏先生（大阪大学大学院人間科学研究科）や岡村和子先生（科学警察研究所）は交通心理学領域で大変ご活躍されている、かつあおり運転に関連する研究業績を多くお持ちの先生です。当日も、あおり運転の交通心理学的背景や最新の知見などを丁寧にご紹介頂き、大変勉強になりました。

今回のシンポジウムでは、先ほどの交通心理学のご専門の先生方のみでなく、大隅尚広先生（千葉大学大学院人文科学研究科）や村山綾先生（近畿大学国際学部）といった、認知神経科学や社会心理学をご専門とする他領域の先生方を交えて、「あおり運転」の問題が多角的に論じられており、大変刺激的でした。当日は、指定討論者（谷口俊治先生　椙山女学園大学文化情報学部）からのコメントやフロアからの質疑応答など、議論が大いに盛り上がっていました。

シンポジウムの詳細については、「応用心理学研究」に記事が掲載されると思いますので、誌面の都合上、こちらでは内容は割愛させて頂きますが、「あおり運転」のみでなく、応用心理学が研究課題とする現代社会の問題の解決のためには、学際的な視点が必要であることを改めて認識しました。



話題提供者の先生方とのディスカッション

司会の小嶋理江先生（名古屋大学）

森泉　慎吾（もりいずみ・しんご）／ 1984年、長野県生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科 助教などを経て、現在は帝塚山大学心理学部 准教授。博士（人間科学）。2009年より日本応用心理学会員。2018年には第85回大会事務局幹事を担当。2021年より広報委員会副委員長。専門は産業心理学。

研究ー仕事二足の草鞋

亀田　凌雅
（帝塚山大学大学院）

私は現在、帝塚山大学大学院の博士後期課程に在籍する大学院生です。平成27年度に帝塚山大学心理学部に入学してから、博士前期課程及び研究生としての期間を経て、今年で９年目の在籍となりました。

私の研究テーマは「対人支援ボランティア場面でのストレッサー」についてです。帝塚山大学心理学部はボランティア活動を中心とした地域連携活動が盛んで、令和４年度は奈良県による「県内大学生が創る未来事業」という政策提案のコンペで最優秀賞を受賞するなど、コロナ禍においてもその活動の輪を広げています。

私の研究は、自身がそうした土壌でボランティア体験を積み重ねたことがきっかけで生まれました。とりわけ心理学部の学生たちはボランティア活動をはじめ対人支援に関わる領域で活動することが多いです。対人支援はやりがいがあるというような肯定的な印象を持つ学生は多いのですが、一方で活動が続かないという学生の姿も見てきました。私自身も、学部生の頃は多くのボランティアに身を投じてきましたが、バーンアウトしてしまったという経験があります。こうした経験から、ボランティア活動者に対しての支援者支援の観点から、私の研究活動を進めるに至りました。現在は、学内のボランティア関連授業でのゲストスピーカーや、ボランティアサークルへの研修活動などを通して、自身の研究を活かしているところです。

そして、私のもう一つの“草鞋”は奈良県内の地方公務員の正規職員というものです。公認心理師として勤務しており、こちらは２年目となりました。現在は発達支援に関わる相談部門で、心理職として研鑽を積みながら勤務をしています。一地方公務員ということで、これまで大学で学んできた“心理学”以外の多くのことを経験している最中です。例えば、選挙の投票事務や、最近では全国的に進められているDX推進の会議への出席など多岐に渡ります。とはいえ、全くこれまでの経験と関係がないかというとそんなことはありません。例えば、研究活動の中で獲得してきたExcelなどのPCスキルは現職場で活かすことができています。心理職としては駆け出しの私ですが、この部分についてはある程度、自信を持って仕事をできていると思います。

ただ、この２足の草鞋については決して楽な道ではないと感じています。大学に行ける時間の限りがあるため、勤務後や有給休暇を取得してその時間を確保しているような状況です。先行研究の確認は通勤時間や昼休憩の時間に行なっていますが、それでも絶対量は足りていないと感じます。こうした状況でも私が１年はこの生活を続けて来られたのには幾つかの要因があります。１点目はサービスの充実です。例えば、翻訳アプリの充実は、海外文献に触れる機会を増やしてくれたと思います。また、研究に関してもWeb調査が比較的安価で容易にできるようになったので、私にとっては追い風でした。インタビュー調査も録音さえしてしまえばある程度は自動で文字起こしをしてくれます。勿論、楽をするということはスキル向上とトレードオフの部分はありますが、仕事をしながら研究を進めるということのハードルを下げてくれたのは間違いありません。

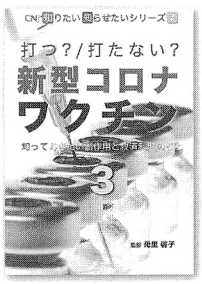
２点目の要因は大学と職場の環境です。両立をする上では、それぞれを許容してくれる環境が欠かせません。指導教員の中地展生教授には指導の時間を個別で土曜日に設定してくださるなどのサポートをいただいています。また、他の先生方も本来は直接伺って質問すべき事項にも快くメールで対応してくださっています。これは学部から在籍して関係を築いてこられたということもあったとは思いますが、先生方のご厚意によって支えられている部分が大きいです。職場についても、有給休暇のタイミングや、残業のないようなペースで勤務ができているという状況作りに対して多大にサポートをしてもらっています。これらのサポート無くして、１年間の研究と仕事の両立はありえませんでした。このようなサポートを得られているということに感謝しつつ、まずは目下の学位取得に向けて精進していきたいと思います。

亀田　凌雅（かめだ・りょうが）／ 大阪府出身。帝塚山大学大学院心理科学研究科で修士（心理学）取得。現在、同大学院博士後期課程に在学しながら、奈良県内にて公認心理師として勤務。研究テーマは対人支援ボランティア。

「コロナ対応を考えるシリーズ」
「打つ?/打たない? 新型コロナワクチン 知っておきたい副作用と救済制度のこと」

田中真介・母里啓子・山本英彦・古賀真子 著

コンシューマネット・ジャパン（CNJ）ブックレット
2021年5月30日 初版
A5版 91ページ
900円(税込) 送料180円



本書では、厚労省や審議会での報告資料をもとに、新型コロナの実態について何がわかっているのかいないのか整理をした上で、過去の教訓に学びながら、ワクチンにどう向かうべきかを考えます。ワクチンの副作用被害の評価については、インフルエンザ問題の専門家の山本英彦医師に、ワクチン問題を考える前提としての感染症対策として、マスクやウイルス検査の問題については筆者が執筆しました。子どもたちや老親へのワクチン接種について心配する切実な相談を受けて、判断の根拠となる重要な情報を広範に収集して本書に簡潔にまとめました。コロナ禍は社会的・経済的な問題でもあります。1日も早い収束とワクチン副作用被害を軽減するために本書が役立つことを切に願っています。

「コロナ対応を考えるシリーズ」
「これからどうする? 新型コロナワクチン 知っておきたい副作用と救済制度のこと」

田中真介・加藤純二・山本英彦・古賀真子 著

コンシューマネット・ジャパン（CNJ）ブックレット
2022年11月15日 初版
2023年4月7日 増補版
A5版 108ページ
900円(税込) 送料180円

2021年5月31日に「打つ？／打たない？ 新型コロナワクチン」を上梓しました。本書はその続編です。前回の出版後、2021年から2022年にコロナワクチン接種により医療現場で起きたこと、子どもへの接種やブースター接種に関する海外のワクチン評価、ワクチンと免疫の仕組み、マスク生活の問題点などを取り上げました。刊行時点の最新データが反映されています。

感染症法が改正され、パンデミック対応の予防接種体制も大きく変わりました。これから新型コロナワクチンにどう向き合っていけばよいのか、マスクはどうするか、その他の予防接種についてどう考えるべきか。新型コロナに関しては多くの書籍が出版されていますが、本書はこれまでのワクチン接種や国の政策を振り返りながら、今後の感染症とワクチンをどう考えるべきかを考える1冊です。

ワクチン接種による重篤な副作用被害が拡大する中で、厚労省やWHOや関連のワクチン推進機関、海外の文献評価、新型インフルエンザ特措法から今回の感染症改正を予防接種法の変遷をも含めて検討し、コロナ対応政策の失敗の原因と構造について総合的に考察しています。

田中 真介（たなか・しんすけ）／ 発達論、神経科学、発達診断学を専攻。京都大学教養部、総合人間学部等を経て2013年より現職（京都大学国際高等教育院准教授）。大学院人間・環境学研究科（共生人間学専攻）を兼担。乳幼児期から児童期・青年期・中高齢期の発達研究とともに、ワクチン接種による医療被害やメチル水銀系農薬による健康被害の研究に携わっている。

『応用心理学ハンドブック』の刊行によせて

藤田　主一
（日本体育大学）

このたび、日本応用心理学会（以下、本学会）企画の『応用心理学ハンドブック』（福村出版）が刊行されました。すでにお手に取られてお読みくださった会員の皆様も多いことと存じます。本書の執筆には、本学会会員の皆様をはじめ、多くの方々のご協力を得ることができました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

すでにご存知のように、本学会の歴史は日本心理学会と並んで長く、1927（昭和２）年に関西応用心理学会が第１回会合をもち、遅れて1931（昭和６）年に東京で応用心理学会の第１回会合が開催されました。そのような流れを経て、1934（昭和９）年に関西と関東の合同大会が行われるに至りました（応用心理学会に「日本」が冠されたのは第２回大会からです）。本学会の正式な誕生がどこを起源とするのかは難しいところですが、いずれにしても創立90周年の歴史を数えることができます。

そこで、これを機に本学会企画の学術的な「ハンドブック」を世に出すことになりました。出版へ向け、藤田主一（当時理事長）、古屋健（同副理事長）、角山剛（同常任理事）、谷口泰富（同前副理事長）、深澤伸幸（同前機関誌編集委員長）の５名がWGとなり、現行の応用心理学として想定される章構成、編集担当者、項目（トピック）の選定、執筆候補者などについて何度も話し合い、2018（平成30）年８月に第１回編集会議が開催されました。全16章の章構成（○○と応用心理学）と編集担当者は、次の先生方です（敬称略）。編集担当者の先生には、各トピックの執筆者をご推薦していただきました。

【研究法】服部環、【認知】星薫、【感情・情動】小林剛史、【教育】伊坂裕子、【発達】田中真介、【パーソナリティ】松田浩平、【臨床】沢宮容子・青木みのり・清水貴裕、【福祉】北川公路、【健康】木村友昭、【看護・医療】川本利恵子・山中真、【犯罪】桐生正幸、【社会・文化】西田公昭、【産業】外島裕、【交通】臼井伸之介・中井宏、【災害】申紅仙、【スポーツ】三村覚。

本書には、各章ごとに当該章の「総説」と基本的に20のトピックが含まれます。最終的な執筆者数は300名を遥かに超え、論文総数334本、858頁の大著になりました。また、各トピックは原則、そのトピックを「歴史と現状」、「研究と動向」、「課題と展望」の３項目に分けて執筆していただき、「研究と動向」には最新の研究を組み入れてもらうことになりました。この分野の研究成果の全容を知ることができると思います。各執筆者は、ご自身の研究を挿入しながら、現時点において応用心理学が目指している研究方向を明らかにされています。巻頭には、古屋現理事長の「刊行にあたって」と、藤田前理事長の「応用心理学の過去から未来へ」の小論があります。目次をご覧いただければ、本書が応用心理学の全体像をほぼ網羅していることに気づいていただけるものと思います。

ここで、会員の皆様、執筆くださった皆様へのお詫びと、本書の刊行に際しての苦労話をご披露いたします。当初、WGの予定では、企画から刊行までおよそ２年間を想定し、2020年の本学会年次大会でお披露目するつもりでおりました。ちょうど本学会90周年と相前後するからです。しかし、この時期に世界的に感染拡大したコロナ禍の影響があり、さまざまな意味で編集等が滞ってしまいました。一方、300を超える執筆者とトピックを抱えると、大変失礼ではございますが、原稿提出締切日に間に合わない先生方もおられ、その結果、編集の作業全体が延び延びになり、編集担当者がご苦労されました。また、原稿の再考をお願いしたり、データの入れ替えの要望があったり、さらに校正にかなりの時間を要したりいたしました。これほど、時間の大切さを感じたことはありません。すべての原稿が出揃った時点で、2021（令和３）年末から2022（令和４）年３月にかけて、WGが最後の確認作業を行いました。その後、福村出版による迅速なご対応のお陰で、2022年９月の本学会第88回大会（京都工芸繊維大学）の会場で、ギリギリお披露目することができました。

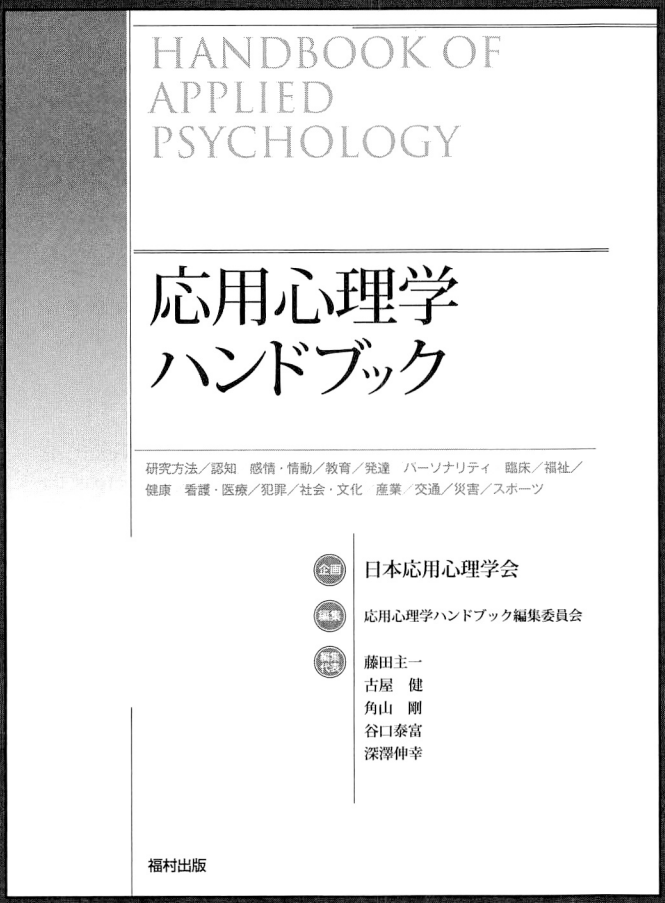
本書『応用心理学ハンドブック』は、本学会が総力を挙げて取り組んだ成果です。編集担当の先生方、執筆くださった先生方には、お詫びとともに深く感謝申し上げます。本学会会員の皆様には、本書は応用心理学に係る大変読み応えのある専門書ですので、どうか手に取られてご高覧くださいますよう、心よりお願い申し上げます。

藤田　主一（ふじた・しゅいち）／ 1950年、新潟県生まれ。日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程単位取得満期退学。日本体育大学名誉教授、日本応用心理学会名誉会員・前理事長。第80回記念大会委員長。日本心理学諸学会連合心理学検定局前検定局長。

日本応用心理学会が総力をあげて送る，
現代応用心理学研究の羅針盤，学会85周年特別企画！

応用心理学ハンドブック

日本応用心理学会
企画
応用心理学ハンドブック編集委員会
編集
藤田主一・古屋 健・角山 剛・谷口泰富・深澤伸幸
日本体育大学名誉教授　立正大学　東京未来大学　駒澤大学名誉教授　松蔭大学
編集代表



2022年9月刊行！！

定価 27,500円（本体25,000円＋税）
B5判／上製・函入／858頁
ISBN978-4-571-20087-8

応用心理学の領域，
全16章（各章／総説＋トピックス），
総計334本，858頁，
圧倒的な質量感！

福村出版

雑学心理学
COVID-19はリーダーに対してどのような影響を与えたのか?

森下　雄輔
(大阪国際大学)

2019年末に、中国武漢市から報告された原因不明の肺炎が発生しました。この新型コロナウイルス「COVID-19ウイルス」がパンデミックとなり、世界各地を襲いました。その結果、国家間の渡航制限や外出制限等が実施されるなど、人の生活や組織における職務のあり方などが大きく変化しました。

ガレステンら(Garretsen et al., 2022) はCOVID-19パンデミックが組織の管理者にどのような衝撃を与え、リーダーシップ行動にどのような影響がみられたのかを検討しています。COVID-19は世界中の個人、組織、社会全体に劇的な影響を与える外的な脅威です。そのような脅威に対して人には硬直的な反応が生じるという、脅威-剛性仮説(Staw et al., 1981) に基づいたリーダーの行動が生起するとガレステンらは予測しました。つまり、COVID-19という、強い外的脅威に曝された組織やリーダーは、よく学習された反応や代表的なリーダーシップ行動を行いやすくなると考えました。調査の結果、実際に2020年3月から6月にかけて指示的なリーダーシップが増加しており、COVID-19と指示的リーダーシップの間に正の関連があることが示されました。また、COVID-19による死亡者数が相対的に多い国では、指示的リーダーシップがより強くなっており、危機がより大きな国ほどその傾向が強くなるという調整効果も明らかになりました。

また、職場における身体の安全に対してリーダーシップ行動が与える影響についても、ますます注目が集まっています。リュブックら(Lyubkh et al., 2022) は、組織内の安全指標(安全風土、安全に対するモチベーション、安全知識など) にリーダーシップスタイルが与える影響について、メタ分析を行っています。その結果、フォロワー自身に焦点を当てた安全構成要素(安全態度や安全知識など) では、関係志向型リーダーシップが他のスタイルよりも重要であり、他者に焦点を当てた安全構成要素(安全風土や安全動機など) では、課題志向型リーダーシップ行動がより重要であることが示されました。また、長期ビジョンの重視や革新的思考など、組織に変化をもたらすことを目的とする変化型リーダーシップ(変革型リーダーシップも含む) は、課題志向型や関係志向型リーダーシップと比較すると安全との関連が弱くなっていました。

COVID-19感染症により、世界中の組織・集団において、管理者やリーダーは対策に追われています。ガレステンらの調査が行われた時点からも、世界の状況は急激に変化しているため、リーダーシップ行動も大きく変化している可能性が高いです。刻一刻と変化する組織の状況にリーダーがどのように対処すべきかを考えることが、実践家や研究者に求められることでしょう。

引用文献

Garretsen, H., Stoker, J. I., Soudis, D., & Wendt, H. (2022). The pandemic that shocked managers across the world: The impact of the COVID-19 crisis on leadership behavior. *The Leadership Quarterly*, 101630.

Lyubykh, Z., Turner, N., Hershcovis, M. S., & Deng, C. (2022). A meta-analysis of leadership and workplace safety: Examining relative importance, contextual contingencies, and methodological moderators. *Journal of Applied Psychology, 107*, 2149–2175.

森下　雄輔(もりした・ゆうすけ) ／ 2017年、帝塚山大学大学院心理科学研究科修了、博士(心理学)。現在、大阪国際大学人間科学部心理コミュニケーション学科講師。研究テーマは「フォロワーが行うリーダー評価が集団適応に与える影響」。

[特別企画]
「応用心理学のクロスロード」会員へのアンケート

森泉　慎吾
（帝塚山大学）

1．本調査について

日本応用心理学会広報委員会では、本学会の会員の方々を対象に、広報誌「クロスロード」に関するご意見をお訊ねすることを目的に調査を実施しました。GWの大変ご多用な中、また回答期間が短い中でご回答頂きました会員の皆さまには厚く御礼申し上げます。頂戴しましたコメント・ご意見は、今後の「クロスロード」作成・運営に大いに参考とさせて頂きます。本稿では、取り急ぎ、簡単な集計結果のみご報告いたします。また、未掲載のアンケート項目については、今後のクロスロード記事などにて扱う予定です。

2．調査の方法

対象者　日本応用心理学会に所属する会員のうち、調査に同意の得られた85名（男性53名、女性29名、その他３名）。20代１名（2.4%）、30代８名（9.4%）、40代27名（31.8%）、50代19名（22.4%）、60代19名（22.4%）、70代９名（10.6%）、無回答１名(1.2%)。大学教員44名(51.8%)、一般企業・公務員・自営業17名(20.0%)、研究者12名（14.1%）、社会人院生３名（3.5%）、大学院生２名（2.4%）、その他７名（8.2%）。

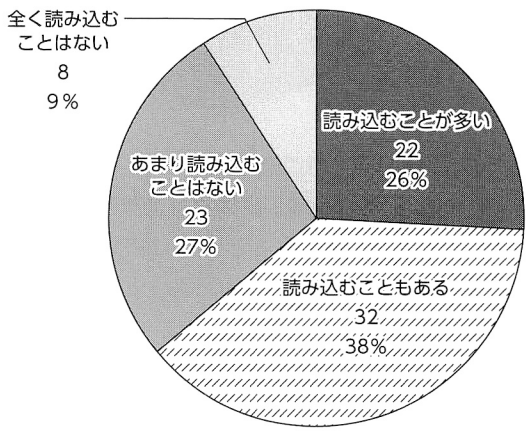
調査期間　2023年４月29日から2023年５月８日までの10日間。

手続き　Googleフォームを用いて作成された調査票へのリンクを、日本応用心理学会のメーリングリストを通じて会員に配信した。

3．調査の結果

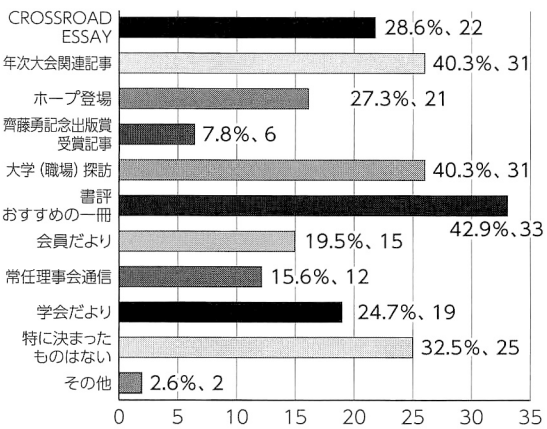
3.1．クロスロードを読み込む程度

設問：あなたは「クロスロード」を読み込むことがどのくらいありますか（n=85）



3.2．読まれることの多いコンテンツ

設問：「クロスロード」に掲載されているコンテンツの中で、どれを読むことが多いですか

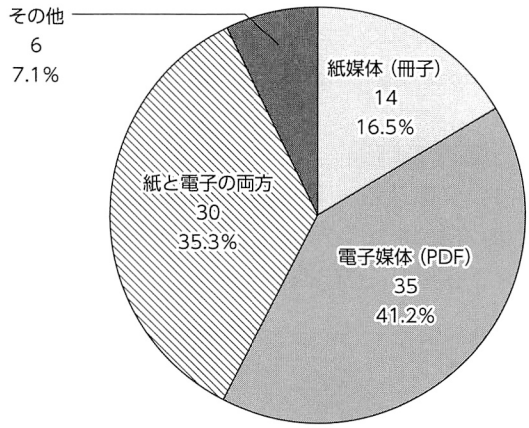


（n=77）※複数回答可

注）割合は回答者（n=77）から算出

3.3. 今後希望する発行媒体

設問：「クロスロード」は現在、紙媒体のみで発行していますが、今後、どのような媒体での発行を希望しますか（n=85）



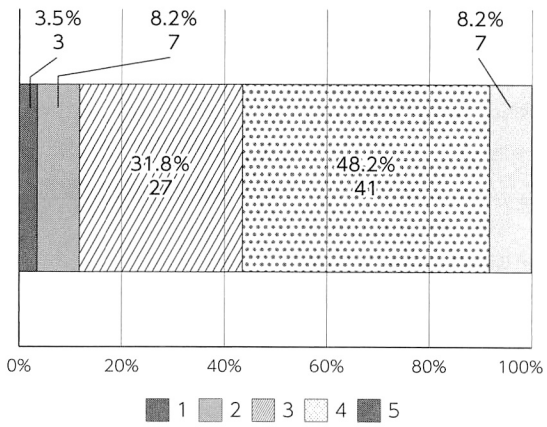
なお、「その他」のご意見として、「どちらでも構わない」「紙媒体か電子媒体を各会員が選択できるようにする」「発行するとすればPDFだが、発行を止めるという選択もありうる」といったご意見も頂きました。

3.4. クロスロードに対する満足度

設問：「クロスロード」の内容に対する満足度をご回答ください（n=85）

※1＝非常に不満～5＝非常に満足

M=3.49（SD=0.89）



3.5. ご意見・ご要望（n=22　任意）

今後の「クロスロード」に関するご意見・要望等について、「学務に追われ、他学会の情報誌も含め目を通せていない。近年の大学教員の研究環境に問題があり、他でも同様であると思われる」「様々なものが電子媒体のみになるが、紙媒体のものは気軽に読めるので、できれば継続してもらいたい」「紙での印刷は経費の圧迫になる。浮いた経費で研究経費等の他の企画ができると思うので、電子ジャーナル化を前向きに検討してもらいたい」「短い文章でも構わないので、なるべく多くの会員が参加できる誌面をお願いしたい」「企業・団体における応用心理学研究の様子などは、営利行為を含むので学会誌には掲載しにくいが、クロスロードなら掲載できると思うので企画として取り扱ってはどうか」などの貴重なご意見を頂戴しました。

文責：森泉慎吾（帝塚山大学・広報委員会副委員長）

1 国際交流委員会

川本 利恵子（湘南医療大学）

今期の大きな仕事は、国際応用心理学会（ICAP 2023）にて発表された先生方の研究報告を英文特集号にて刊行準備をすることでした。しかし、新型コロナウイルス（COVID-19）の影響で、ICAP 2023は中止となりました。次回は、イタリア・フィレンツェにてICAP 2026が開催されます。

この他に、国際交流に関する事業も当委員会の活動の範疇となります。学会活動のさらなる活性化を目指して、積極的な取り組みも視野に入れて活動をしていきたいと考えています。会員の皆様におかれましては、何か良いアイデアや情報等がございましたときには、当委員会までお寄せくださいますと幸いです。

（かわもと りえこ）

2 齊藤勇記念出版賞選考委員会

川本 利恵子（湘南医療大学）

この賞は、本学会名誉会員の齊藤勇先生の趣旨および基金により平成27（2015）年4月より施行されている出版賞です。本学会の会員により、応用心理学や心理学のテーマを、心理学を専門としない一般の方々にわかりやすく書かれた書籍とその著者を表彰することを目的としています。出版賞の対象書籍は、本学会会員による推薦（他薦・自薦）により、選考委員会で検討され、常任理事会にて決定されます。出版された当該年度（4月1日～翌年3月31日）の書籍について、原則単著、当該年度内に1冊としています。出版された次年度の年次総会において、賞が授与されます。

2021年度として、2022年3月に一般会員から推薦書が提出されました。選考委員会および常任理事会にて検討され、受賞が決まりました。ご紹介いたします。

著書名：いい人間関係は「敬語のくずし方」で決まる
著者名：藤田 尚弓　発行所：青春出版社　発行年月日：2021年9月

著書の内容は、第1章は敬語を上手にくずせると、なぜ人が集まってくるのか。第2章は、失礼なく敬語をくずす「3つのポイント」。第3章は、ストレスなく敬語をくずす「7つのステップ」。第4章は、この相手にはこうくずす！ タイプ別攻略法。第5章は、シチュエーション別！ 敬語のくずし方実例集。第6章は、メール・オンライン時代に役立つ敬語のくずし方。

以上、会員の皆様も、ぜひご一読ください。（かわもと りえこ）

3 機関誌編集委員会

上瀬 由美子（立正大学）

軽部副委員長と編集委員の皆さまに支えられ、本年度も無事に48巻の1～3号を発行することができました。ご投稿いただいた会員の方々、査読に関わって下さった会員・非会員の皆様、そして審査・編集にご尽力いただいた編集委員の皆様に厚く御礼申し上げます。

本学会のホームページにてお知らせしましたように、『応用心理学研究』執筆要領が2023年3月に改訂されました。前年度に行った倫理的配慮に関する記述の厳密化が要領に反映されるとともに、日本心理学会の「投稿の手びき」改正に伴い引用文献の表記の仕方や図タイトルの位置も変更されています。48巻3号の誌上掲載には間に合いませんでしたが、学会ホームページにて改訂版執筆要領が掲載されておりますので、ご覧いただければ幸いです。会員の皆様の積極的なご投稿をお待ち申し上げます。（かみせ ゆみこ）

4 学会活性・研究支援委員会

田中 堅一郎（日本大学）

当委員会は、日本応用心理学会の活性化と研究支援（とりわけ若手会員の研究支援）を中心に活動しています。当委員会は私（田中）が委員長を担当し、外島 裕先生（副委員長、日本大学名誉教授）を始め、稲葉 隆先生（日本カラーデザイン研究所）、小林敦子先生（川越市男女共同参画審議会）、種ヶ嶋尚志先生（日本大学スポーツ科学部）、和田万紀先生（日本大学法学部）の委員で構成されます。

1．若手会員研究奨励賞について

2022年度若手会員研究奨励賞は、2022年11月30日を申込締切日（当日消印有効）として募集されました。期日までに所定の応募書類を提出した応募者は1名で、旧審査部門でいえば第2部門に該当する内容でした。審議の結果、以下の1名に若手会員研究奨励賞が授与されることとなりました：

・**金山英莉花**（同志社大学大学院心理学研究科 博士後期課程1年次生）
研究課題名：幼児期における「マルチモーダルな音程知覚」が「音程知覚と発生運動の統合」に及ぼす影響

昨年度から応募資格を改定して応募範囲を広げましたが、今年度の応募者数はわずか1件でした。応募者なし・受賞者なしという事態は避けることができましたが、昨年度と同様応募者が少ないことに変わりがありません。今後は若手研究者を指導している会員に対しても、改めて若手会員研究奨励賞についてのアナウンスが必要かもしれません。

今年度受賞された金山氏の研究については、研究計画や方法について課題や問題点はあるものの、審査委員全員から高い評価が得られ、選考委員会において全会一致で受賞が決定いたしました。その後、2023年3月11日（土）に開催された第5回常任理事会で審議され、承認されました。

2．応用心理士の上級資格設置について

一昨年度より継続審議となっていた応用心理士の上級資格設置について当該委員会で審議が進みました。

当該委員会においては、現時点では職場への応用心理士活用促進のために上級資格設置を進めるべきであるという意見で一致しており、当面は上級応用心理士と呼ぶこととします。上級応用心理士（仮称）については現時点で以下の点が当該委員会で合意されました：

(1)上級応用心理士（仮称）認定制度の目的　上級応用心理士認定制度は、個人や集団の心理学的指導に努力している人びとの社会的地位を承認するための一助として位置づけられ、多様な心理学的ニーズをもつ個人・家族・組織、および地域社会に対して、質の高い心理学的な視点から支援やサービスを提供できることを目指し、（上級資格）の資質と研究の水準を維持し向上させることに寄与することによって社会のウェルビーングに貢献するためのものである。

(2)上級応用心理士の資格要件　以下を満たすこと：①応用心理士として認定された後、満3年経過した時点で申請可能とする（日本応用心理学会入会後最短6年目で申請可能となる）。②応用心理士として行った「活動報告レポート」を提出する。レポートは、A4で4枚程度（4,800字以上）とし、一つのレポートについて委員2名が評価する。さらに、①②に加えて、以下の要件のうちいずれかを満たすこと。すなわち、日本応用心理学会入会後において、(A)「応用心理学研究」に1件以上の研究論文（共著を含む）が掲載されること、もしくは「年次大会」で3件以上の研究発表(単独または責任発表が1件以上)をおこなっていること。(B)「年次大会」で5件以上の研究発表(単独または責任発表が3件以上）を行っていること。(C)応用心理学関連の職に満6年以上の経験を有し、かつ企画委員会「研修会」もしくは当該学会が主催する「公開シンポジウム」のいずれかに6回以上参加していること。

付則：なお、経過措置として、本規定の施行時に(A)(B)(C)のいずれかの条件を満たした応用心理士でない者は、日本応用心理学会入会後6年を経過している場合、①の規定に関わらず、「応用心理士」および「上級応用心理士」の資格の申請を同時に提出することができる。なお、この申請期間については、本規定施行後3年間に限るものとする。

(3)上級応用心理士設置の課題　以下の点が論議されました：①資格審査をどうするのか。例えば、審査委員の選出方法、評価基準（例えば、申請者のこれまでの実践経歴、もしくは研究履歴）、審査料（例えば、審査料・認定料合計20,000円）など。②上級応用心理士（仮称）を設置するためのエビデンスがないため、日本応用心理学会として応用心理士に対する意見を聴取して今後の応用心理士運営に反映させるため、上級応用心理士（仮称）の対象となる応用心理士を対象とする、資格取得の動機、資格取得のメリット等についての調査を実施すべきである。

当委員会では今年度も引き続き、上級応用心理士について具体的な資格承認手続きについて論議する予定です。（たなか けんいちろう）

5 広報委員会

谷口　淳一（帝塚山大学）

広報委員会では7月にクロスロード第14号を発刊しました。当初の予定よりだいぶんと遅くなってしまいましたが、2年ぶりに開催され、また初のオンライン大会となった第87回大会の報告を中心に、CROSSROAD ESSAYや大学探訪など充実の内容になったと自負しています。執筆頂いた先生方、改めてありがとうございました。

夏前からは第15号の発刊に向けて、委員会を開催し、企画案を練りました。その結果、第15号についても、久々の対面大会となる京都工芸繊維大学の第88回大会の記事を中心とした構成にすることとなりました。9月の大会には、委員長である私や、副委員長の森泉先生、委員の森下先生のメンバーで参加し、多くの先生方に原稿依頼をお願いしました。どの先生方も依頼に対して執筆を快諾して頂き、またクロスロード編集に対する委員会への労いの言葉も頂きました。第15号にはこれまで以上に研究発表をされた先生方の記事を多数掲載することができ、コロナ禍で長らくできていなかった対面での発表や議論ができたという先生方の喜びや充実感が伝わる内容になっているかと思います。また、第88回大会の大会委員長であった来田先生をはじめとした準備委員の先生方の気概も伝わるかと思います。取材や原稿執筆にご協力いただいた、来田先生をはじめとする準備委員の先生方に改めて感謝申し上げます。

第16号については現委員会メンバーで取り組む最後の仕事となりますので、これまでできなかった企画にも取り組みたいと考えています。会員の皆様にはまた原稿執筆のご依頼をさせて頂きますので、ご執筆よろしくお願い致します。（たにぐち　じゅんいち）

6

企画委員会

桐生　正幸（東洋大学）

2022年度の企画委員は、前年に引き続き、桐生正幸（東洋大学）、上市秀雄（筑波大学）、小嶋理江（名古屋大学）、島田恭子（東洋大学・㈳ココロバランス研究所）の４名のメンバーにて運営を致しました。実施した企画は、「学会研修会」と「公開シンポジウム」の２つになります。

１．応用心理士研修会

2022年度第88回大会（京都工芸繊維大学）にて実施された研修会にて、両日オンライン（オンデマンド）にて実施しました。全動画にて合計87回の視聴がありました。

①講師：島田恭子先生（一般社団法人ココロバランス研究所・東洋大学現代社会総合研究所）
　題目「メンタルを味方につける」
②講師：阿部光弘先生（三井住友海上火災株式会社）
　題目「心理学を活用した保険金詐欺対策」
③講師：尾藤昭夫先生（東洋大学現代社会総合研究所）
　題目「ポリグラフ検査面接再考：心理学的知見を社会でいかすために何が必要か」

２．公開シンポジウム

2022年11月19日（土）13：15～15：30、名古屋大学野依記念学術交流館にて、小嶋先生が中心となり開催致しました。各話題提供者からの示唆に富むお話しの後、フロアーからの質疑応答やディスカッションが活発に行われました。ドラレコメーカーの方やトラック運転手の方などからの質問もありました。

・タイトル：『いわゆる「あおり運転」について考える！』
・企画立案者：小嶋理江（名古屋大学未来社会創造機構モビリティ社会研究所　特任助教）
・共　催：名古屋大学　未来社会創造機構　モビリティ社会研究所（GREMO）／ライフスタイル革命のための超学際移動イノベーション人材養成学位プログラム（TMI）

・日　時：11月19日（土）13：15～15：30
・方　法：対面・会場でのリアル開催（オンライン併用なし．録画視聴期間あり）
・場　所：名古屋大学 野依記念学術交流館
・内　容
　話題提供：中井　宏（大阪大学大学院人間科学研究科 准教授）
　　岡村和子（科学警察研究所 交通科学部 交通科学第二研究室 研究室長）
　　大隅尚広（千葉大学大学院人文科学研究院 准教授）
　　村山　綾（近畿大学国際学部 准教授）
　指定討論：谷口俊治先生（椙山女学園大学文化情報学部 教授）
　司　　会：小嶋理江（名古屋大学未来社会創造機構モビリティ社会研究所 特任助教）
　運営委員：桐生正幸、島田恭子
・当日、会場参加者 56名（事前申込者数88名、スタッフなどを除く）

3．感想と今後について

2年目ということもあり、また各メンバーからの多大なご協力により、この度も、おかげさまで（ほぼ）無事に乗り切れたところです。本当にありがとうございました。

次年度の応用心理士研修会では、対面形式にて心理学の社会実装に関する話題を、また公開シンポジウムの企画運営は上市先生より進めていただく予定です。

ぜひ、ご期待ください。（きりう まさゆき）

7 倫理委員会

田中　真介（京都大学）

■倫理委員会の構成

今期は、田中真介（京都大学）、大坊郁夫（北星学園大学）、蓮花一己（帝塚山大学）、外島裕（日本大学）が担当しています。理事長制がスタートして以降は次のメンバーで倫理委員会を担ってきました。

（6期：18～21年度）古屋健、大坊郁夫、谷口泰富、蓮花一己。
（5期：15～18年度）谷口泰富、井上孝代、楠本恭久、森下高治。
（4期：12～14年度）谷口泰富、田之内厚三、楠本恭久、森下高治。
（3期：09～11年度）藤田主一、岡村一成、荻野七重、大坊郁夫、細江達郎。
（2期：06～08年度）荻野七重、大橋信夫、南 隆男、蓮花一己、星野仁彦、細江達郎。
（1期：03～05年度）藤田主一、浮谷秀一、田中昌人、福原眞知子。

倫理委員会の前身として「倫理綱領作成委員会」が発足し、1期の委員が中心となって本学会の倫理綱領が上梓されました。

（参考）日本応用心理学会「倫理綱領」：https://j-aap.jp/kitei/rinri.pdf

■本年度の活動

（1）基本方針

倫理委員会は従来、会員の研究活動に何らかの倫理的な問題があったときに対応を考えるといった役割を担ってきました。今期は、そうした問題対応型の活動だけではなく、みなさんの研究への取り組みの中で、倫理的な見方・考え方そのものが深まっていくような活動ができないかを模索しています。ご意見やアドバイスをいただきたいところです。今年度は昨年度に引き続いて、次のような方針を立てて会員の研究をサポートしてきました。

1）会員の研究実践を倫理的な観点から支える：

問題が起きたときに「ペナルティを与える」、倫理的なミスを「取り締まる」といった、後手にまわった抑制型の対応ではなく、会員の研究実践の中での倫理的な思考が深まるように系統的に援助していくことができないか。

2）研究対象を尊重した研究のあり方を会員とともに考える：

対象の尊重によって、得られたデータの信頼性も高まり、よりよい研究となっていく。そうすることで研究者自身が自らの研究の社会的・実践的な価値を実感することができ、自身の研究領域で新たに大事なテーマ・課題を発見し創出することにつながるのではないかと考えました。

（2）具体的な活動：

①会員の研究活動での倫理的配慮に関する支援の一環として、年次大会の大会委員会と連携して、学会大会の準備段階でのサポートに取り組んできました。また、「応用心理学研究」投稿論文の倫理面については、機関誌編集委員会とともに具体的な援助を行っています。査読の過程で、審査者は倫理的な配慮の内容を明記することを求める場合はあるのですが、記載不足を指摘して修正してもらうという趣旨だけでなく、研究対象をどのように大事にしたかを意識して論述を深めてほしいという願いが込められています。

②各期の倫理委員会では、各大学・研究機関の「倫理綱領」「倫理規程」を収集し比較検討してきました。今年度は、倫理委員の所属する大学や諸学会の関連資料の比較検討を行いました。また、会員の方々にも協力を仰いで、各大学の倫理審査の実情や課題について話を伺い、研究倫理及び研究対象者の保護に関する最新情報の収集と分析を続けています。

第1期の倫理委員会（藤田主一委員長）は、世界各国のおもな学会・諸機関の倫理綱領の案文を文字通り「悉皆（しっかり）」と「すべて」取り寄せて検討していました。その基礎的な研究成果が応心の現行の倫理綱領の策定に生かされています。今期も引き続いて、丁寧な基礎資料の収集と分析を心がけ、また会員のみなさんとの対話を通じて、よりよい研究活動が実現していくような心のこもった援助を行っていきたいと考えています。（たなか しんすけ）

8 事務局だより

軽部　幸浩（日本大学）

日本応用心理学会事務局では、会員の皆様からの問合せや新入会員の受付など、さまざまな事務処理を一手に引き受けています。

わが国の応用心理学的活動は1920年ころからすでに芽生えていましたが、その当時は実験・基礎の研究

が中心でした。そのような中で、日本応用心理学会は、心理学の研究が社会の具体的な問題解決に資することを目指し、広い専門領域の研究者が集まり1936年に設立されました。このように伝統のある学会において2021年4月より第7期理事体制の下、事務局長を拝命しました。微力ながら、会員の皆様へのサービス向上と応用心理学の普及に少しでも役立つことができれば幸甚です。

そこで、会員の皆様におかれましては、お気づきのことがございましたら、どうかご遠慮なく学会Webサイトに用意してある「問い合わせ」に忌憚のないご意見やご要望をお送りください。できるだけ皆様方のご意見やご要望を反映し、より一層の素晴らしい学会にしたいと考えています。

なお、学会事務の業務委託を締結した株式会社国際ビジネス研究センター（International Business Institute; IBI）には、日ごろから多大なる尽力を賜っており、深甚なる感謝を申し上げます。

（かるべ ゆきひろ）

9 学会賞選考委員会

木村　友昭（一般財団法人 MOA健康科学センター）

学会賞選考委員会では、学会賞（論文賞および奨励賞）の選考と、優秀大会発表賞の選考を行っています。学会賞は、「応用心理学研究」に掲載された論文の中から、理事・監事の先生方の推薦をもとに選考し、その結果を常任理事会で審議いただき決定します。一方、優秀大会発表賞は、大会の一般発表の中から、参加された会員の皆さんの投票結果をもとに選考します。

2022年度の第88回大会は、京都工芸繊維大学にてハイブリッド形式で開催されました。会場にお越しにならない参加者がおられるため、前年度に引き続き、投票にGoogleフォームを使用しました。選考結果は、すでにホームページで公表されていますが、その表彰式は2023年度の第89回大会（亜細亜大学）にて行われます。第89回大会は、久しぶりに対面での開催の予定です。参加される会員の皆さんに、ぜひとも投票をお願いしたく存じます。

なお、現在、学会賞規程の改正について、作業を行っています。本規程の改正は、総会での審議と議決が必要です。第89回大会に合わせて開催される総会で、ご審議のほど、よろしくお願いいたします。

（きむら ともあき）

10 学会史編纂委員会

委員長 **古屋　健**（理事長）・委員 **軽部 幸浩、藤田 主一**

日本応用心理学会「学会史編纂委員会」（以下、本学会、本委員会）は、理事長直轄の委員会として2016（平成28）年度より活動を開始しました。本委員会は、本学会および日本の応用心理学の発展に関係する記録を継承し、新たな視点から本学会の発展を遠望することを目指しています。その最大の使命は、設立

100周年を前の節目へ向けたさまざまな準備をすることにあります。そこで、本委員会ではアーカイブという立場から、①本学会に関わる資料・史料の蒐集と編纂、②蒐集した成果の公表、③名誉会員へのインタビュー、④『日本応用心理学会100年史』の編集・発行、等の活動を計画的に進める予定でいます。

特に、本委員会設立直後から始まった名誉会員へのインタビューでは、本学会の発展にご貢献くださった先生方から、本学会でのご活動やご自身のご研究のこと、また会員の皆様方や今後の心理学界へのご提言などについて、直接、貴重なお話をうかがってまいりました。2022年度も「名誉会員へのインタビュー」を年度計画の目玉として掲げていたのですが、新型コロナウィルスの感染拡大が収束する気配がなく、残念ながら2020年度より３年連続で実施できずにおります。昨年度に引き続き、「お約束しておりましたのに、まだ実現できない名誉会員の先生には大変申し訳ございません。もう少しお待ちください」と、この場を借りてお詫び申し上げます。2023年度には、インタビューが再開でき、先生方の有意義なお話をお聞かせいただけるものと期待しております。

最後に、クロスロードをお読みの方にお願いです。たとえば、転勤・引っ越しなどの折に、本学会に関わりのありそうな古い資料や冊子などが偶然に見つかることがあるかもしれません。もし皆様の周辺で、何かこのような本学会に関わる貴重な資料・史料と思われるものがございましたら、是非とも、学会事務局までご一報いただければ幸いです。（ふるや たけし・かるべ ゆきひろ・ふじた しゅいち）

11 心理学検定

小林　剛史（文京学院大学）

2021年度、第14回からComputer Based Testing（CBT）化した心理学検定は、2022年度から夏期に加えて春期の実施を実現しました。団体受検制度も、学校法人等の担当者の方々の利便性を考えたバウチャー制度に改め、さらに下限人数も10名と緩和しました。今後もCBT化のあらゆるメリットをさらに推し進めていく所存です。一部、従来型の検定廃止を惜しむ声が聞かれます。年に１度のイベントとして心理学検定を楽しみにされていたというお声は何度もお聞きしています。また、コンピューター操作で受検するという形式に慣れないことでお気持ちが遠のいている方、検定に際して不自由を経験されていて現状で受検が困難な方も実際にいらっしゃいます。今後、心理学検定は従来型検定の利点をCBT形式でも可能な限り活かす工夫を不断に行い続ける必要があると考えています。まだまだ受検者の方々にご不便をおかけし、たいへん恐縮ではありますが、今後も心理学検定を宜しくお願い申しあげます。

先述したように、心理学検定は年２回の開催となりました。そして2023年度より、夏期の心理学検定は７月15日から８月31日まで、春期の心理学検定は２月15日から３月31日までの実施となり、僅かにではありますが実施時期が長くなります（開始日が祝日の場合は前倒しとなります）。しかし、春期の心理学検定は、未だ全国的な浸透に至っておらず、その存在すら認知されていない方々も多いと推察します。年２回の検定実施は、短期間に受検者の級取得の可能性を高める目的に加え、今後の普及が期待される大学院入試免除制度に対応するという目的も見据えたものです。大学関係の方々には、上記免除制度の導入も含め、心理学検定を是非ご活用くださいますよう、改めてお願い申しあげます。（こばやし たけふみ）

2022年度日本応用心理学会学会賞

［敬称略、所属は論文掲載当時、順不同］

論文賞

「カロリー情報の表示位置が消費者の食品選択に及ぼす影響」

井上　裕珠（日本大学 商学部）

［掲載雑誌］
『応用心理学研究』 第47巻 第3号，165-177，2022

奨励賞

「単独のふりシグナルは幼児のふりの理解を促すか
— ふり場面と現実場面との比較から —」

伴　　碧　（大阪大学大学院 基礎工学研究科）
内山 伊知郎（同志社大学 心理学部）

［掲載雑誌］
『応用心理学研究』 第47巻 第1号，37-46，2021

学会だより

日本応用心理学会の入会申込書を次にご案内しますので、入会を希望する方はお申し込みください。
このページをコピーし必要事項を記入して、学会事務局宛までご郵送ください。

日本応用心理学会入会申込書（一般・院生・学生）注2，注3

		申込年月日	20　年　月　日
フリガナ		推薦者（会員）注6	
氏　名			㊞
ローマ字		性　別	男・女
		生年月日	年　月　日
現住所	〒＿＿＿＿		
	電話番号	（　　）	
最終学歴	〔　年　月〕【在学中のものではなく，卒業あるいは中退・修了について学科名まで】		
所　属注4	名　称		
	所在地	〒＿＿＿＿　電話番号＿＿＿＿（　　）	
	職名 現学歴	【職名の場合には年数，院生の場合には課程・専攻，学部の場合には学校名・学年】	
研究領域注5	テーマ		
	原理　学習　認知　感情　教育　発達　人格　臨床　福祉　相談　健康　看護 医療　犯罪　社会　文化　産業　交通　災害　スポーツ　生理　行動分析　調査 統計　その他（　　）		
メールアドレス			
備　考			

※申込用紙の個人情報は、学会活動や運営上必要な事務連絡、本学会の事業目的達成のため以外に利用されることはありません。

記入上の注意

注1．楷書で正確に記入してください。
注2．申込書の上部に書かれている会員種別で，**希望する会員の種類を○印で囲んで**ください。
注3．一般会員，院生会員の入会資格は，会則第4条第2項に次のように定められています。
一般会員，院生会員の入会資格は，次の通りとする。
(1)四年制以上の大学で心理学およびその隣接分野を専攻した者
(2)一般社団法人日本心理学諸学会連合が認定する心理学検定1級合格者で22歳以上の者
(3)第1号に準じ常任理事会が認める者
(1)の隣接分野とは以下の分野を指しています。
教育学，児童学，人間関係学，体育学，社会学，社会福祉学，芸術学，宗教学，医学（心身医学，精神医学，行動医学など），看護学，経営学，認知科学（人口頭脳など），人間工学，など。
(1)の入会資格に該当しないと判断される場合は，備考欄に高等学校卒業後の学歴および職歴（年数）をできるだけ詳しく書いてください。(2)の入会資格にて入会を申し込まれる場合は心理学検定1級合格証のコピーを添付してください。(3)の第1号に準じるものと認めることができるかを判断する資料とします。記入欄が不足したときは別紙に書いて添付してください。後日さらに詳細な資料を求める場合もありますのでご了承ください。
注4．社会人学生の場合には，在学大学（大学院）名等詳細を備考欄に記入してください。
注5．研究領域は，**主な3領域を○印にて囲んで**ください（3つを超えて○印を付けてもかまいません）。
注6．推薦者を必ず書き署名・捺印をもらってください。推薦者がいない場合には，理由書を添付してください。

事務局受付〔　　〕　審査〔　　〕　本人連絡〔　　〕　会費納入〔　　〕

「応用心理士」のご案内

小林　剛史
（「応用心理士」認定審査委員会 委員長）

日本応用心理学会では、学会員で業績のあるものに対し、本人の申請により一定の手続を経て、「応用心理士」の資格認定証を交付しています。

資格認定は、厳重な試験に合格しなければ一定の資格を取得できないものもありますし、心理学に関する所定の単位を取得すれば一定の資格を認定するところもあり、まさにさまざまです。本学会では認定の基準を一歩進めて、学会の会員（名誉会員・一般会員・院生会員）であること、きちんとした業績を持っていることを主要な要件にしています。この資格は、個人や集団の心理学的指導に努力している人びとの社会的地位を承認するための一助として考えられています。

「応用心理士」は資格であって免許ではありませんが、これを所持することによって職場における活動は現在よりもさらに拡大され、多くの人びとの承認を受けると思っています。もちろんこの「応用心理士」の資格を取得したからといってなんでもできるわけではありません。人事・労務関係、医療・看護関係、司法矯正関係、交通関係、教育関係、相談関係などの仕事に従事している人が、心理学的な仕事の重要性をわきまえ、十分留意して活動することが必要であると考えています。

「応用心理士」の資格要件をご参照の上、認定審査の申請をされますことをお待ちいたしております。

日本応用心理学会認定「応用心理士」資格認定申請の御案内

「応用心理士」事務局

本誌の「応用心理士の現場」では，応用心理士資格を活かして活躍する会員の皆様をご紹介しています。多趣多様な分野で心理学の知見を発揮される会員が1人でも多くなりますよう，ぜひ資格の取得をお勧めします。

【認定制度の趣旨】

日本応用心理学会では，学会員で業績のあるものに対し，本人の希望により一定の手続を経て，標記の「応用心理士」の資格認定証を交付することにいたしました。

現在，いくつかの心理学関係の学会で資格を認定しています。厳重な試験に合格しなければ一定の資格を認定しないところもありますし，心理学に関する所定の単位を取得すれば一定の資格を認定するところもあり，まさにさまざまです。本学会では認定の基準を一歩進めて，学会の会員（名誉会員・一般会員・院生会員）であること，きちんとした業績を持っていることを主要な要件にしました。資格要件の詳細についてはこの手引きのなかに明記されています。この資格は，個人や集団の心理学的指導に努力している人びとの社会的地位を承認するための一助として考えられたものです。

【資格要件】

学会で認定する「応用心理士」は，学会員の専門職としての資質があると認められた証明になります。

資格の要件は，日本応用心理学会認定　「応用心理士」認定制度による認定資格の基礎的条件として，本学会に入会後満2年を経過し，現在会員であることが必要です。

さらに，次の（1）から（4）のいずれか1つに該当し，応用心理学の専門職としての資質があると認められた人に認定されます。なお，（1）から（4）のいずれかの要件も完全に満たすことができない場合は，該当内容を総合し，判断されます。

（1）　学校教育法に定められた大学または大学院において，心理学専攻又はこれに準ずる分野を卒業あるいは修了した者（学位授与機構の審査により学士の学位を授与された者も含む）。

（2）　本学会機関誌『応用心理学研究』に1件以上の研究論文（共著も含む）を発表した人，または本学会の年次大会において2件以上の研究発表（単独発表または責任発表のもの）をした者。

（3）　認定審査委員会が応用心理学と関係があると認めた専門職で，3年以上の経験を有する者。

（4）　応用心理学と関係ある職で3年以上の経験を有し，本学会研修委員会企画の「研修会」に5回以上参加した者（申請時に5回分の「受講証明書」を添付してください）。

【資格申請の手続き】

会員で日本応用心理学会認定　「応用心理士」の資格を得ようとする人は，以下の順序に従って申請の手続をしてください。

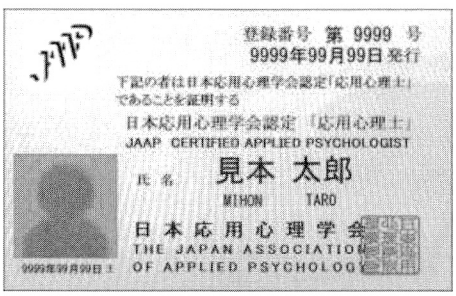
［1］「応用心理士」の資格申請書類をダウンロードしてください（学会ホームページに掲載）。

［2］申請書類に所要事項を記入し，下記の申請受付期間内に，送付してください。

［3］審査料（10,000円）は，郵便振替で送金してください。
郵便振替の振込先
口座番号　　00110－6－359059
加入者名　　日本応用心理学会
※注意：申請書類一式の中に同封されている郵便為替用紙をご利用ください。

［4］提出する申請書は次の通りです（提出の際確認してください）。
（1）様式1（資格認定申請書）
※所定の枠内に証明証用カラー写真（ヨコ35mm，タテ45mm）を貼付してください。
※審査料の振込金受領証をコピーし貼付してください。
（2）様式2-1（履歴書）
（3）様式2-2（業績書）
（4）「研修会」参加を資格要件とする場合は，「受講証明書」5回分を添付してください。

［5］認定審査委員会では，提出された書類について審査し，結果を文書にて，申請者に通知します。合格した人は認定料（30,000円）を納入してください。入金されますと，日本応用心理学会認定　「応用心理士」として認定し認定証を交付します。また，日本応用心理学会認定　「応用心理士」名簿に登録するとともに，本学会機関誌『応用心理学研究』に掲載して公表します。



応用心理士認定書（カード）の見本

【申請受付期間】

	【前　期】	【後　期】
申請受付期間	毎年4月1日～6月末日	10月1日～12月末日
審査結果通知	8月上旬	翌年2月上旬
認定料納入日	8月下旬まで	翌年2月下旬まで
認定証の送付	9月下旬	翌年3月下旬

【応用心理士事務局】

日本応用心理学会認定　「応用心理士」事務局
〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町518　司ビル3F
株式会社　国際ビジネス研究センター内

広報委員会

谷口　淳一　（委員長）
森泉　慎吾　（副委員長）
谷田　林士
古谷　嘉一郎
森下　雄輔
吉澤　寛之

表紙写真：「蒼天と鐘の響き」
2018年11月23日
（撮影：森下雄輔）

応用心理学のクロスロード Vol.15

編集・発行　日本応用心理学会
〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町518
司ビル3F
(株) 国際ビジネス研究センター内
TEL.03-5273-0473
FAX.03-3203-5964
E-mail　j-aap@ibi-japan.co.jp
HP　https://j-aap.jp/

デザイン　株式会社 杏林舎
印刷・製本　株式会社 杏林舎

2023年7月31日 発行

編集後記

■　第15号やっとお届けすることができました。春の予定が今号も夏になってしまいました。早々に原稿を提出してくださった先生方には原稿の鮮度が落ちてしまい重ね重ねお詫び申し上げます。さてそんな第15号ですが、久々の対面学会となりました京都工芸繊維大学での第88回大会の活気が伝わる内容になっているかと思います。ポスター発表にうかがい、質問させていただいた後に、「原稿を～」とだまし討ちのようにお願いするのは少し気がひけましたが、すべての先生方にご快諾いただき、本当に感謝いたします。第16号へのご寄稿もぜひお願いいたします。（谷口　淳一）

■　今号も、ようやくになりますが皆さまの元に「クロスロード」を無事お届けできたことに安堵しています。原稿依頼を差し上げました先生方におかれましては、執筆にご快諾頂き、また大変興味深いご寄稿を賜りましたことをこの場を借りて厚く御礼申し上げます。会員交流の機会として是非、皆さまご一読下さい。また、今回は新たな趣向として、会員の皆さま宛に「クロスロード」に関するアンケート調査を実施させて頂きました。短い回答期間ではありましたが、たくさんの方にご回答いただき、誠にありがとうございました。本号にも結果の一部が掲載されておりますが、また改めてご報告させて頂ければと思っています。（森泉　慎吾）

■　谷口委員長のお人柄、森泉副委員長の誠実な仕事ぶりに、甘えてばかりの委員ですが、「クロスロード」の編集過程を通じて、応用心理学会の魅力や今後の可能性を肌で感じ続けています。学会も対面開催となり、ますます交流が深化していくなかで、この「クロスロード」の情報が、様々な分岐場面での意思決定に少しでも役立つものとなったら…と願っています。今後も委員長、副委員長のリーダシップのもと、微力ではございますが、尽力していくつもりです。よろしくお願いいたします。（谷田　林士）

■　編集委員になって、改めてクロスロードを見ておりました。これまでの委員の先生方のご尽力により、たくさんかつ多様な分野の研究者の声が視覚化されていることがわかりました。他学会に比べ、これだけの会報はなかなかないぞと感じた次第です。また、今年の4月、ある先生から「応用心理学会に入りたいんだけど、古谷さん推薦者お願いします」と依頼が参りました。学会事務局の皆様の迅速なご対応により、無事にその先生は入会できました。そして、亜細亜大学にて学会発表をするはずです。こういった、多様性かつ迅速な動きができる学会はなかなかないなあと思いつつ今回のクロスロードの校正作業をしております。（古谷　嘉一郎）

■　私が広報委員として編集に携わる2号目の「クロスロード」となりました。本誌には先生方にもご協力頂きました「クロスロード」に関するアンケート結果も含め、多くの先生方に御寄稿頂きました記事が多く掲載されております。私も前号に引き続きコラムを執筆させて頂きましたので、お時間を持て余した際にでもご笑覧下さい。今号も谷口委員長を筆頭に他の編集委員の先生方のお力に頼る形になりましたが、引き続き微力ながら尽力致しますので宜しくお願い致します。
（森下　雄輔）

■　クロスロードの編集委員も2年目となり、ようやく学会賞へのコメントというかたちで微力ながらお役目を果たすことができたと思います。学会賞コメントで心配していた人間ドックの結果が本日出ましたが、さらなる節制を誓う事態となっております。委員長や副委員長はじめ委員の皆様の多大なる貢献のおかげで、読み応えのある一冊になったかと思います。と言いつつ、ここまで読まれている方はすでに読破されたと思いますが、いかがでしょうか。今後さらに対面の学会が増えると思いますので、直接お会いした際にでも素朴な感想をお聞かせください。本誌がより良くなるよう、忠実に委員長へお伝えいたします。（吉澤　寛之）

幅広い心理学の知識を測定する、学術団体が直接行っている信頼できる検定です。

一般社団法人 日本心理学諸学会連合 認定

心理学検定

受検資格

学歴・年齢問わず受検を希望する全ての方に受検資格があります。

出題科目

心理学の10科目を出題します。科目は2領域に分類され、1科目あたり20問出題します。

A領域【原理・研究法・歴史】【学習・認知・知覚】【発達・教育】【社会・感情・性格】【臨床・障害】
B領域【神経・生理】【統計・測定・評価】【産業・組織】【健康・福祉】【犯罪・非行】

出題方式・試験時間

多肢選択方式で出題します。試験時間はA領域/B領域ともに100分間です。

試験方式

コンピューターを使用して試験を行うCBT方式で実施します。試験期間中、全国47都道府県にある試験会場からご都合の良い試験会場・日時を選ぶことができます。

資格認定

合格科目数に応じて、「特1級」「1級」「2級」の三種の級を認定します。

特1級 A領域5科目・B領域5科目 全10科目の合格者
1級 A領域4科目を含む合計6科目以上の合格者
2級 A領域2科目を含む合計3科目以上の合格者

合格科目有効制度

各科目の合格は、一定期間「合格」として認められます。一回の受検で資格認定基準を満たす必要はなく、複数回受検することで、より上位の級へ段階的に挑戦することができます。

受検料

受検領域	一般	団体※2
A領域	￥7,700	￥6,600
B領域	￥7,700	￥6,600
A・B領域※1	￥12,100	￥9,900

※1 A・B領域セット割引を適用した金額です。
※2 代表者による団体申込と10名以上の受検申込で適用されます。

一問一答形式の問題集！

公式問題集＆基本キーワードも発売中！

＼心理学を極める人も。心理学を始める人も。／

受検申込・受検予約方法

A領域／B領域 個別申込

受検予約サイトで試験会場・日時の予約
（コンビニ/Pay-easy/クレジット払い）
↓
予約した試験会場・日時で試験実施

A・B領域 割引セット

心理学検定ホームページより
A・B領域セット割引の申込
↓
受検料を指定口座へ振込
（受検チケット入手）
↓
受検予約サイトで試験会場・日時の予約
（受検チケット払い）
↓
予約した試験会場・日時で試験実施

※団体の方は、団体代表者からの案内に基づいて受検申込・受検予約を行ってください。

お問い合わせ
心理学検定局 〒113-0033 東京都文京区本郷5-26-5-901
E-mail : info@jupaken.jp Fax : 03-3830-0303

お申し込みはこちら。今すぐ詳細を確認！
https://jupaken.jp/

JAAP

The Japan Association of Applied Psychology